魔法少女リリカルなのは―夢を追う少年の行き先

ヤニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは―夢を追う少年の行き先

【Ｎコード】
Ｎ７８６５Ｏ

【作者名】
ヤニー

【あらすじ】
夢を追い、気ままに仲間たちと過ごしていたある日、ヤンデレの少女達に追われそして殺された主人公。だが何故か次にやってきたのはリリカルなのはの世界！！　彼はそんなことを知らずに生きていく。果たして彼が紡ぐ物語は…？

オリキャラ転生の原作知識微妙の主人公です。戦闘はありません。
一生懸命書いていきますので感想など貰えればうれしいです！！
Ａ' Ｓ編完結しました。

プロローグ（前書き）

初めまして、ヤニーです。誤字、脱字等ありましたらご報告頂ければ幸いです。感想お待ちしております！

プロローグ

「なあ…おかしいってマジで」

学校の屋上にて追いつめられてる俺。

なんでこんな状況になってるのか俺が知りたい…。

「どうして…？　何もおかしくなんてないよ…？」

いやいや、誰がどう見てもおかしいですからね！？

彼女の横で死んでいる女性二人。

血まみれのナイフと返り血を浴びた彼女。

そんな彼女にナイフを向けられてる俺。

……これなんて死亡フラグ？

あの馬鹿は言った…。

『お前とよく一緒に見かける三人の女の子マジでりりなのキャラにそっくりじゃね！！』

あの馬鹿は言った…。

『その立ち位置俺と変わってくれよ！！』

あの馬鹿は言った…。

『まあでも俺は…三次元に興味無いからやっぱ良いわ』

「ねぇ慎一君…どうしてそんな悲しそうな顔してるの？」

とてもおかしそうに彼女は言う。

「お前こそ…どうしてそんなに笑ってるんだよ？」

彼女はくすりと小さく笑って…。

「だってようやく邪魔者を消せたんだから嬉しいに決まってるよ」

とても綺麗な笑みで彼女は笑う。

「慎一君だって…嬉しいでしょ？」

あの馬鹿の家で見たアニメにこんなセリフがあったな…。

『世界はいつだってこんなことばかりじゃなかったはずだ』

ホントこんなはずじゃなかったんだけどなぁ…。

「人殺しと一緒に居て嬉しいわけねぇだろ…俺の前から消えろ」

「……もういいや」

笑みを消し彼女は無表情になる。

――ああ、展開が読めたわ――

「そんなこと言う慎一君なんて…死んじゃえ」

杉矢慎一（１８）高校三年生はこうして死んだ。

第1話「初めての転生」

――人って死んだらどうなるの？――

誰もが1度は考えただろう。ちなみに俺の持論は何もないだ。いや…だったが正しいだろう…。

何故ならば…。

「転生？」

「そう、君には転生してもらうよ」

今、俺は死後の世界に居るからだ。

第1話「初めての転生」

まずここまでの流れを理解するには少し話を戻らなければいけない。

ってその前に自己紹介をしようか。

俺の名前は杉矢慎一（スギヤシンイチ）。

まあどこにでも居る高校生だ。

そんで趣味は音楽鑑賞とバンド活動。んでもって将来はＲｏｃｋバンド組んで音楽で飯を食っていく！

夢を持った今時の高校生だ。

そんな俺にも悩みがあった。それは…幼馴染同然の女の子３人だ。

まず１人目、田村綾香。

俺の家のご近所さんで、３兄妹の末っ子。

茶色の髪にサイドポニーがとてもよく似合ってる女の子。

俺とは幼稚園に入る前からの仲で、中学からは向こうの家の都合で学校は違かったがそれでも付き合いが減ることはなかった。

２人目は、エミリ＝水樹＝クリスティン。愛称はエミー。

この子は小学校５年生の時にアメリカから転校してきた子だ。父がアメリカ人で母が日本人のハーフらしい。

たまたまその時に席が隣になったこともあって学校とか街を案内してるうちに仲良くなっていった。

特長は見れば誰もが振り返る綺麗な金髪の髪だろう。

おまけにスタイル抜群だったし…。

３人目、植田マキ

彼女は俺のバンドメンバーの一員だ。ベースを担当している。

俺とマキは好きなアーティストが大分被ってるから一緒にライブ見

に行ったりと音楽に関しては一番付き合いが深い。
俺の夢にも素直に共感してくれたとても良い奴だ。
茶色のボブショートカットヘアーがモチーフの子。

この彼女たちは傍から…いや、俺から見ても魅力的で、そんな3人に好意を持たれていた俺は幸せ者なのだろう。

だが、3人は……俗に言うヤンデレだったんだ。

ヤンデレとは俺もよくわからないんだが…。まあ好意を持ちすぎて壊れちゃった人たちかな。

俺の友達の中に『ヤンデレってさ、裏を返せば自分だけを愛してくれるってことだろ？　ならそれって良いんじゃね？』というアホな発言をした奴が居た。
その時は若干ながら賛成した俺だが、いざ自分がそこに立つとまったくよろしくない。

今思えば俺は彼女たち以外の女子と友達付き合いが続いたことは無い。
委員会の仕事とか部活動で女子と喋った翌日にその子が俺を見て真っ青になったのはきっと気のせいだろう。

まあそんなこともあって高三の夏に俺は綾香によって殺された。
俺を殺す前に綾香、エミー、マキの三人が殺し合いを目の前で繰り

広げたなんてことは思い出したくない、ああ思い出したくない。
んで、死んだ俺は気づけば真っ白な世界に居た。
やることもなく佇んでいた俺を出迎えたのが…神様。
神様が胡散臭いとか俺だって思うがこいつは本当に神様らしい。
そんで冒頭に戻る。

「転生？」

「そう、君には転生してもらうよ」

転生ねぇ…、あの馬鹿が『トラックに轢かれて俺は二次元へ転生するんだあぁぁっ！！』とか抜かしてたこと以外には聞いたことない単語だ。

「まあ転生とやらは良いんだけどさ、記憶は受け継がれるわけ？」

「おや、何故転生するかは聞かないんだね？」

「聞いたって理解できないだろうし、なら第二の人生を楽しませてもらうさ」

「ふふ、それなら話は早いね。あ、記憶は受け継がれるから安心していいよ。それと…君に一度だけ使えるスペシャルな能力を与えよう」

「なんだよ”スペシャルな能力”って…？」

「いいかい？　それはね…――――」

「……滅茶苦茶だな」

「僕もそう思うよ」

ハハッと神様は苦笑した。そもそもお前が与えるんだろうが。

「それじゃぁ、そろそろ行くよ、準備は良い？」

「ああ」

「よし…それじゃあ」

神様は杖を振りかぶった。杖の先が白く輝いている。
そのまま杖を見つめていたら意識が遠くなるのがわかった。

ああ…これが転生…って奴なん…だ…な。

俺の意識はそこで途絶えた。

第2話「ああ、この世界は腐ってやがる」

「この世界は…腐ってやがる」

「兄ちゃん？」

「のわっ！？　あのさぁ、はやて？　頼むからいきなり現れないでくれ…」

「むぅ～、なんで兄ちゃんはわたしが来ると顔を引き攣らせるんや？」

「まぁ…その…あはは」

第2話「ああ、この世界は腐ってやがる」

「転生してから１４年…早いもんだなぁ」

１４年前、俺は綾香によって殺されてその後、死後の世界からこの世界へと転生した。

八神慎一…これが俺の名前だ。

何故か下の名前の部分だけは変わらなかった。

そして俺がこの世界で第二の人生を歩み始めた7年後に妹が生まれた。

名は…。

――八神はやて――

どっかで聞いたことあるような名前だったが、初めて出来た妹に俺はテンションＭＡＸだったため気にならなかった。

初めての兄という立場になって、俺は妹に嫌われるような兄にはなりたくなかったためずっと一緒に居て遊んだりした。

はやては生まれた時から足が不自由だったがそんなことは俺には関係なかった。

むしろそのおかげで妹の世話ということでずっとはやてと一緒に居られたりした。

そして初めてはやてが言った言葉は『にいちゃん』だった。
この時俺は嬉しさのあまりはやてに抱きついていたがその横で両親が落ち込んでいたのは目の錯覚だ。
そんな幸せな時を過ごしていた１１年間だったが…その年に両親は死んだ。

――この世界は腐ってやがる
丁度この頃からこの単語は俺の口癖となっていた。

両親亡き後、俺たちの後見人にはグレアムという人が後見人となった。
なんでも父さんの古い友人らしい。
その人が援助してくれてたということもあり、生活には困らなかったが…常に疑問を持っていた。
当時まだ１１歳の俺と脚が不自由な４歳のはやての二人で暮らしていくのって普通ありえるのだろうか？
少なくとも前の俺の世界ではありえない。
だからこそ……。

「この世界は腐ってやがる」

1年後、俺は12歳の小6に、はやては5歳となった。

この頃から思ったんだがはやてが『マキ』に似てる気がする…。気のせいだと思いたい…。

また1年後に不思議な出会いをした。

”俺を殺した田村綾香”が居た…。

正確には綾香じゃなくてその子は『高町なのは』という顔と声が異常に綾香に似ているという子だ。

初めて彼女と出会ったのは俺が買い物の帰りに近道に使う公園を通った時、彼女がベンチに座っていた。

それを見た俺は思わず両手に持った袋を落として硬直してしまった。

その音と視線に気づいた彼女が俺に声を掛けてくるのに時間はかからなかった。

「どうか…したんですか?」

その首を傾ける仕草はますます綾香にそっくりだった。

「いや…その…あはは…」

思った以上に動揺していて口が回らない。

「そ、それより君こそこんな場所でどうしたんだい？」

「そ、それは……」

彼女は顔を傾けてしまった。

というか今うっすらと涙が見えた。

「君…泣いているのか？」

「そ、そんなこと…――「おーい！！　なのはぁーっ！！」――うぅ…」

彼女の発した声を男の子の声が遮った。

その声の方向へと顔を向けると俺は思わず硬直してしまった。

「なのは、ここにいたんだね」

「…どうしたの？　かずやくん」

「なのはがどこかに走り去って行ったって美由希さんが言ってたから探しにきたんだよ」

その”かずや”くんはニコッと笑みを彼女…”なのは”ちゃんに向ける。

（おいおい……）

かくいう俺は別のことを考えていた。

（なんだこの…”オッドアイ、イケメン、髪が金色”の揃ったあの馬鹿が考えそうなキャラは）

こんなの（言っちゃこの子に失礼だが）あの馬鹿の二次創作でしか見られないと思ったが…現実に居るんだな。

「ところで…この人は誰だい？」

そのかずやくんは俺に視線を寄こしなのはちゃんに問いかけた。

……何故か彼から敵意剥き出しなんだが…。

「このひとはその…」

当然なのはちゃんは困る。

だってまだ話して1分も経ってないんだから。

「わかった、もういいよ。…もしあなたがこの子に手を出す気だったらそんなことはさせませんよ」

おーおー、なんか俺この子を襲うような人設定らしいよ。

「なのは、逃げるよ」

「あ、まって…」

彼が彼女の手を引っ張り、走って行ってしまった。

なのはちゃんは申し訳なさそうな顔をしていたけど…まあ仕方ないわな。

そして取り残された俺はというと……。

「ああ…この世界は腐ってやがる」

お決まりのセリフを吐き出した。

第3話「なのはと綾香」

「あ……」

「お……？」

あの不思議な出会いから1ヶ月。俺と彼女は再び出会った。

第3話「なのはと綾香」

「あの時はすみません！」

「いや…大丈夫だって」

おそらくあの時のかずやくんの行動を指しているのだろう。

「それよりもさ…君はなんで泣いていたんだい？」

「な、泣いてなんか…」

「嘘はあまり関心しないな」

「あ…え、えっと…」

どうやらこの子はあまり嘘がつけない性格らしい。

（……あの時みたいだな）

綾香と初めて会ったときは確か綾香が泣いてたんだっけ。

何でも父親が病気で倒れて家庭がちょっと崩壊しつつあったんだよな。

そんでそんな綾香を見つけたときもこんな流れだった。

あの時俺は綾香に何をしたんだっけ…？

（……あれか）

確か…歌ったんだっけ……。

「ふぅ…」

「……？」

すぅっと息を吸い込む。
彼女は俺が何をする気なのかは理解は出来てないらしい。

「～～♪　～～っ♪」

なのはちゃんは最初歌いだした俺を不思議そうな目で見ていたけれど、やがて歌に聴き入ってくれた。

俺が歌っているのは前の世界で存在していたL'Ａｒｃ～ｅｎ～Ｃｉｅｌというバンドの『Ｐｉｅｃｅｓ』という曲だ。

所詮赤ペラにすぎないし、俺の歌唱力で果たして大丈夫なのかは分からないが…。
それでも彼女の心に響いてくれたらと思う。

そして曲は最後のサビへ突入し…。

「ふぅ…」

無事に最後まで歌い終わる。

この曲は俺の大好きな曲で、悲しい時があればいつだってこの曲を聴いていた。

「あの…凄く良かったです！」

なのはちゃんは笑顔で俺に拍手を送ってくれる。

「なぜか…お兄さんのうたを聴いていて凄くげんきが出ましたっ！」

――慎一くんの歌を聴いたら…元気が出てきた…

「お兄さん…ありがとう！」

――慎一くん…ありがとう！

やっぱり…似ている。

綾香となのはちゃんはよく似ている。

「良かったよ、元気出してくれて、君は笑顔が良く似合うよ？」

「あ、ありがとうございます…」

ちょっと照れくさかったのかうっすらと頬を染める。

「それじゃ、またどこかで」

踵を返して、ここを立ち去ろうとすると後ろから声が掛かった。

「あの！　お名前はなんて言うんですか！？　わたしは高町なのはです！」

名前くらい答えようかと思ったが…。

「ん…夢追い人と覚えといてくれ」

何故かそう答えてしまった。

（こんな名前…あの馬鹿なら厨二病とか言うんだろうな）

よくその意味は分からないがあいつならそう言う気がする。

「ま、また会えますよね！？」

「君が笑顔を忘れることが無ければ会えるさ」

振り返らないまま手を振って答える。

我ながら臭いセリフを吐いたものだ。

真上に佇む太陽はアホと言わんばかりに俺を照らし続ける。

そんな太陽を見上げて。

「ああ、この世界は腐ってやがる」

いつものセリフを吐きだした。

第４話「大切な我が家のお姫様」（前書き）

えーと、説明し忘れてたのですが、主人公の前世の女の子たちに声優さんの名字が使われているのは単に名前が思いつかなかっただけです（笑）

第４話「大切な我が家のお姫様」

「兄ちゃん？　どないしたの、ボーっとして」

「おっと、すまんすまん。何か用か？」

「別に何か用ってわけやないけど…ってなんで逃げるんや！？」

「いやいやいや逃げてなんかないですよ？」

「だってわたしが抱きつこうとするとすぐ逃げるやんかぁ…。兄ちゃんは私のことが嫌いなんやなぁ…」

「ちょちょちょっ！　泣かないでくれはやて？　……おい」

「えへへー、つっかまえた！」

高町なのはちゃんにエンカウントしてから1年、平和に時が流れて行った。

はやてに声を掛けられたのを忘れて回想に入ったら怒られた。
そして尚且つ抱きつかれた。

別にはやてに抱きついてもらうのは嫌じゃない。
むしろ嬉しい。……って俺は何言ってんだ!?

まあいい、でもはやてがマキにそっくりなんだよなぁ…。

今でも忘れられねぇよ…あの目は…。
マキだけじゃない。綾香もエミーも壊れた目だった。

女の壊れた目ほど怖いものは無いと思う。

だから去年くらいから俺ははやてに対して恐怖感があって若干怯えてる。

もちろんはやては何も悪くないんだけどな…。

「兄ちゃんは去年から変わってもうた」

抱きついたはやてが俺を見上げて言う。

「わたしなんか兄ちゃんにした？　言ってくれれば治すから…」

さっきの涙は強ち嘘泣きでも無いようだ。

そしてより一層抱きしめる力が強くなるはやて。

……苦しい。

（どうする？　言うかのか？　俺が転生者だってことを）

言ってしまえば解決するかもしれない。……多分だが。

しかし言うのが怖い。もし妹に気味悪がられたら死ねる。ああ間違いなく死ねる。

だから言うのは止めた。

「あっ……」

その代わりに黙って頭を撫でてあげた。

はやてはそれを受け入れ、だんだんと目が細くなってくる。

小さい頃からはやては頭を撫でればすぐに眠る子だった。

そんなはやてが眠るのには時間が掛からなかった。

「眠っちまったよ、このお姫様は…」

まだ3月で温かいとはいえすでに夕方。ここで眠らせると風邪を引いてしまうかもしれない。
抱きついたまま車椅子に座る器用な妹君を部屋に連れてくことにした。

いくら顔と声がマキに奇跡的に似ていてもやっぱりこの子は八神慎一の妹の八神はやてだ。

植田マキではない。

いい加減割り切ろう。

はやてをベッドで寝かせるためにはやてを俗に言うお姫様だっこで持ち上げる。

はやての年頃でましてや女の子なら軽いんだがはやてはもっと軽かった。

（俺も毒されてんな…）

すやすやと眠るはやての寝顔を見ながらそっと顔を撫でる自分に少し苦笑した。

もしかしたら自分はシスコンに値するかもしれない。

――そんなのはごめんだ。

前の世界で妹持ちの友人が言ってた記憶がある。

俺は……まあどっちでもいいか。

「さって、今日は何を作ろうかね…っと」

夕飯にはまだ時間があるからボイストレとかギターとかを弄るのも悪くは無い。

父さんががよほどＲｏｃｋが好きだったのか部屋は防音式でギター、ベース、ドラム、キーボードが揃っている。

その部屋にベッドがあるのはどうしてかか考えたくない。

幼い頃、夜中に部屋を覗いたらベッドがやけに揺れて人の声が聞こえたなんて俺は知らない。

ベッドでプロレスごっこをしていた両親が全裸だったなんて俺には見えなかったはずだ。

その声が母親の喘ぐような声を出していたなんて俺には覚えにない。

さらにその後、新しく弟か妹が出来るなんて報告はきっと気のせいだった。

きっとはやては別の日に行った行為で出来たんだ。そう思わせてくれ。決してあの夜がピンポイントでは無いように。

ともかく父さんのお陰で前世の記憶のある俺にこの部屋は宝物が詰まった部屋だ。

だから時間があればこの部屋に入り浸っている俺は幼くしてヒッキーなのだろう。

高校に上がったらバンドメンバーを募集するのも悪くない。

その時は絶対男のみにしよう。

間違っても共通点が多い女子なんてメンバーには加えない。

まだ見ぬ未来に若干ながらわくわくする俺だった。

第5話「懐かしい馬鹿たちの日々」（前書き）

すみません！　大学関連で更新遅れました；

なるべく遅れないように頑張ります（汗）

第5話「懐かしい馬鹿たちの日々」

「うぃーす」

「やあ慎一」

「おせーよ」

「うっせ」

「今日もタカシは元気だよ」

「来る途中に声が聞こえた」

第5話「懐かしい馬鹿たちの日々」

俺たちはほぼ毎日と言っていいくらいタカシ家に集まる。
理由はもちろんあいつが家から出ないからだ。

「タカシがまた新しいエロゲ作ったみたいだね」

「またかよ…見事にエンポスまで用意されてやがるし」

「前回のはなんだったっけ?」

「女装物だったね」

「…今回は?」

「義母、姉、妹、若い叔母、従姉、従妹との近親相姦物だよ」

「うわぁ〜!!　やりたくねぇ!!」

「うっせぇぞ健二…」

俺たちが集まってる部屋のテーブルには3台のノートパソコンとエンポス手袋が用意されている。

タカシは俺らがあいつの私物に素手で触るとキレる。
それはもうキレまくる。
思わず土下座させられてしまうくらいまでキレる。
だから毎回エンポス手袋が置いてあるのだ。

「てか今日はいつも以上に発狂＋爆音状態だけど何かあったか?」

「ああ…今日はバンド物のアニメが最終回なんだってさ、えっと…名前なんだっけ？」

「『けいおん！』だよ」

「そうそう『けいおん！』だ」

「だからあいつあんなに荒れてんのか」

タカシの部屋はこれでもかってくらい部屋に流してる音楽が爆音で流してある。

それはもうライブハウスとかのレベルじゃない。

あのアニメ風に言うなら『ばくおん！』だ。

苦情の数は数え切れないくらい来てる。

それはもう某プロ野球選手の通算ホームラン記録もビックリなくらいだ。

それでもこりずに曲を流し続けてるあいつはさすがだ。

そして何故に耳がイカれないのだろうか。

『イェア”アァァーーッ！！』

「あれってあんな曲だったっけ？」

「違うと思う」

「違うよね」

――歌は叫べば良い

それがあいつの歌に対する持論だ。
はっきり言って俺から見れば冒涜してるようにしか聞こえんがな。

「ところで最近あいつはＰＣに向かって何書いてんの？」

俺たち3人でタカシ作のエロゲをプレイしてると健二が突然言ってきた。

「えーと、たしか何かの小説書いてるんだよ」

あくまで画面から目を離さずに答えるサクラ。

「アレだろ？　こないだまで俺たちに強制鑑賞させたアニメの魔法少女ものだろ？」

「えーと…魔法少女リリカル……」

「夢か……」

もう懐かしいくらいに昔の夢だ。
いつもの楽しかった日々といつもの面子。
最後何かとても大事なことを言いかけてた気がするが…まあいいか。

「……」

あいつらはどうしてるだろうか？
俺が死んだ後も馬鹿騒ぎしてるんだろうか…？

俺も…混ぜてく――「兄ちゃんおはよう、ご飯できたよ！」

はやてが扉を勢いよく開けて部屋に入ってくる。
車椅子なのにとても器用に入ってくる。

そしてすかさず俺の腹へボディプレスしてくる辺りはさすがだ。

「ん？　兄ちゃんどないしたん？」

「ゴホッ…お前が原因だろうがっ！」

「きゃう！」

少し乱暴気味に頭を撫でりつける。
はやては嫌がる様子もなく喜んでいる。
「……ったく」
「えへへー…」
とても可愛らしい笑顔がそこにあった。
やれやれ、俺は何を心で思ってたんだろうか。
ここには愛すべき妹が居るってのにさ。
「ほんとあいつらは腐ってやがる」
「なんか言うた?」
「何でもないさ、飯にしようぜ」
「うん!」
――ホントどの世界も腐ってやがる

オリキャラ紹介（前書き）

えーと、ヤンデレ3人組の名字が声優様と一緒ですが他意はありません！
思いつかなかっただけです（キリッ

オリキャラ紹介

まず作者は…どうでもいいでよねそうですよねｗ
それではどうぞ←

人物紹介

名前：杉矢慎一
職業：高校３年生
趣味：音楽活動

この物語の主人公でありヤンデレ３人組に愛され殺された可哀想な人。
学校の屋上にて３人に追いつめられ殺されてしまった。
バンドではＶｏ＆ａｍｐ；Ｇｔ担当だったが何でも出来る。新しい世界でも同じ夢を持つ。
というか音楽に関することなら天才。耳コピとか余裕人間。
決して妹がヤンデレにならないで欲しいと願うが果たしてどうなることやら。

「ああ、この世界は腐ってやがる」

名前：田村綾香
職業：高校２年生
趣味：慎一鑑賞

ヤンデレ３人組の一人で慎一を殺した張本人。
昔はそこまでヤンデレ属性は無かったが、エミー出現によりヤンデレ化した。

高町なのはの激似少女。

「慎一くん…ずっと一緒だよ」

名前：エミリ＝水樹＝クリスティン
職業：高校3年生
趣味：慎一のストーカー

金髪美女の巨乳。小5に留学してきて慎一と出会う。
小、中、高で全て慎一と同じクラスになる。
フェイト・テスタロッサ激似少女。

「シンイチのことで知らないことなんてないんだよ？」

名前：植田マキ
職業：高校1年生
趣味：先輩コレクション

ヤンデレ3人組の最年少で慎一を「先輩」と呼ぶ。バンドではベースを務める。
慎一の捨てた、落とした物をコレクションとして扱う。
八神はやて激似少女。

「私の物は私の物、先輩の物も私の物。でも私を先輩にあ・げ・る」

名前：タカシ
職業：ニート
趣味：発狂、エロゲ制作

発狂人。

「イエア”アァァーーッ！！」

名前：サクラ
職業：高校1年生
趣味：？

年下だが慎一たちを呼び捨てにする。
実はエミーの弟。
慎一のバンドのギター担当。

「やあ、慎一」

名前：健二
職業：フリーター
趣味：バイト

バイト大好き人間。
慎一、健二、サクラ、タカシはいつも一緒。
慎一のバンドのドラム担当。

「ヤンデレってさ、裏を返せば自分だけを愛してくれるってことだろ？　ならそれって良いんじゃね？」

第6話「原作？　はぁ…原作ねぇ」（前書き）

感想来る度にドキドキします。
自分の作品が評価されたか？　批判が来るか？
どっちが来るかわからないこの緊張感が好きですw

というわけで絶賛感想受付中です（笑）

第6話「原作？　はぁ…原作ねぇ」

いきなりやけど、わたし八神はやては兄ちゃんこと八神慎一が大好きや。
それはもう兄妹とかの壁なんか関係無しで大好きや。
8歳の子供の感情といえど舐めたらあかんよ？　この気持ちはホントなんやからな。
兄ちゃんはここ数年あまり抱きつかせてくれへんけど絶対…。

「あのーはやて？　何をぶつぶつ言ってるんだ？」

第6話「原作？　はぁ…原作ねぇ」

朝からはやての不気味な独り言を聴き流した俺は学校へ行く用意をする。

『こうなったら色仕掛け…あかん！　わたしのお子様体型じゃあかんて！』なんて聴こえない聴こえない。
『なら兄ちゃんに近寄る女を…』なんて決して聴こえないぞ！！

はやてがマキ化してきたのに胃を痛めながら学校へ向かう。

このままだと俺の将来が危ないからちゃんと怖がらず相手をしよう。
またヤンデレに追っかけまわされるのはごめんだ。

ホントどこで教育法を間違えたのやら……。

ちなみに俺は１６歳…高校１年生になった。

中学じゃ軽音部が無かったが、高校ならあるはずだ。
だから絶対に軽音部に入ろう。

でも部活始めたら家に帰る時間が遅くなるんだよなぁ…。
あんな不吉なことを言う妹といえど今年９歳を迎える子供。

どうしたもんか……。

新たな高校生活と言っても所詮２度目、何事も無く過ごしている。

軽音部についてはとりあえず保留しておこう。

それと帰り道の近道にフェレットが転がっていた。

大分弱ってたけれど動物があまり得意でない俺はスルーすることにした。

ごめんなフェレット。

「お帰り兄ちゃん！　ご飯にする？　お風呂にする？　それとも、わ・た・し？」

「……」

――お前は腐っている。

思わず言いかけた。だが我慢した。

俺は無言でその横を過ぎ去って部屋に荷物を置きに行った。

「無視するなんてひどいわ兄ちゃん」

「自分の妹の将来に不安を持ち始めた」

「兄ちゃんがもらってくれるから心配あらへん」

「はぁ～……」

天国に居る父さん、母さん。
今だけでいいから蘇って来てください。
そしてこの子に常識を教えてあげてください。

なんてありもしないことを願った。

いやもしかしたら。

――いいかい？　それはね……――――

止めとこう、フェアじゃない。

「ところで兄ちゃん」

「ん？」

「今日なんか変な夢見たんやけど…」

はやて曰く、傷だらけの少年が暗い森の中変な生物と戦い敗れて倒れる夢。

夢ってのはその日あったことを記憶として保存し、脳の作業中に起きる現象らしいが時に願望も混じるらしい…と、こないだテレビで聞いた記憶がある。

まさかお前は男を甚振る願望でもあるのか!?

無いと信じたい。いや信じさせてくれ。

「あ……」

「なんだ?」

「声…聴こえん?　こう…助けてくださいって…」

「まったく聴こえないんだが…」

「あれ…わたしがおかしいんかな?」

「疲れてるんだろ?　もう寝ときな」

「う〜ん…兄ちゃんの言うとおりにしくわ……じゃあ一緒に…」

「俺、父さんの部屋に籠ってるから」

「むぅ〜……」

そんな可愛らしく頬を膨らませてもダメだからな？

妹と寝るのは…特にはやてと寝るのは止めとけと無意識に勘が告げる。

「兄ちゃんのいじわる…」

「いじわるとかじゃないからな？　ほら、部屋までは一緒に行ってやるから」

「じゃあお姫様だっこで」

「はいはい……お姫様」

俺もなんだかんだで甘いんだな…。

我が家の我がまま姫を部屋に運んでいく。

こうして夜も更けるのだった。

第7話「もう一人の転生者」（前書き）

どうやって八神家以外でなのはたちに絡ませようか悩んでいます；
A's まで絡み無しのするべきか…うーむ？

第7話「もう一人の転生者」

こう…最近電波を受信するんだが…。
『原作だ！　無印だ！　幼女だぁぁっ！！』ってな感じで。
しかもそれがタカシボイスという…。
原作ってなんだ…？

第7話「もう一人の転生者」

本日は日曜日なり。

そんなわけで今日ははやてを連れて図書館に来ている。
俺や両親も含めどうやら八神家は読書が好きな模様。
だから図書館は結構常連だったりする。
だが……。

「あぁぁーーーっ!?」

図書館は常連だが図書館で周りに迷惑をかけるくらいの大声で叫ぶ子供は未だかつて見たこと無い。
親の顔が見てみたい、どうゆう教育をしてるのやら…。

「な、なんでアンタがここに居るんだよ!?」

この図書館には俺とはやてと目の前の金髪、オッドアイ、イケメンが三つ揃った少年しか居ない。
というかこの子どっかで見たことあるような…?

「ああ…タカシ君か」

「誰がタカシだ!!　僕は相馬一弥だ!!」

だってこの子タカシが考えそうなキャラそっくりなんだよなぁ。

「兄ちゃん…知り合い?」

「ああ……―「兄ちゃん…?」―どうかしたか?」

突如、このタカシ君が（改める気なし）割って入ってきた。

「まってくれ…アンタの名前は？」

「ん…？　八神慎一だけど？」

「……」

「……」

「……」

「……」

重い沈黙。

「嘘だあああぁぁーーっ！？」

タカシ君の絶叫が響き渡った。

ところで『相馬一弥』ってどこかで聞いたことあるような…？

side　kazuya

突然だけれど僕は転生者だ。
こっちに転生してからは相馬一弥と名乗ってる。

転生者の僕はいわゆる原作知識持ちだ。
そう、『魔法少女リリカルなのは』のだ！！
このシリーズが大好きだった僕は何回も見直したりイベントにも参加しまくった。

そしてこの世界に転生した僕はおそらくオリ主なのだろう。

だから僕はこの世界でハーレムを実現する！

なのはの家の近所で美形、オッドアイ、金髪持ちで魔力も推定ＳＳＳランクのいわゆる最強オリ主！！
これはもう神様からオリ主になれと告げられたようなものだ！

……そう思っていた時期が僕にもありました。

たった今この瞬間までね！！

side　shinichi

「それで…？　何かな？」

突如絶叫したタカシ君に連れられて図書館の外にまで来た。

「あんたも…転生者なのか？」

「あんたも…ってとこは君も転生者なのか！？」

なんてこったい、転生者が俺だけじゃないとは…。

「それともう一つ、原作知識は持ってるのか？」

「……は？」

「だ・か・ら！　原作知識だよ！『魔法少女リリカルなのは』！！」

……。

あーーーっ！！

思い出した！

この子タカシが書いてた二次創作の主人公だ！！

それも魔法少女リリカルなのはだったはず…！

「そういうことだったかタカシ！！」

「だからタカシじゃないって！！」

「やれやれ…俺としたことがなんでタカシを見て思い出さなかったんだろう…」

「こいつは人の名前を覚える気が無いのか！？」

「こうなりゃ俺の出来ることはただ一つ…関わらないこと！じゃあな、タカシ！」

「タカシじゃ……、もういいや僕も疲れたから帰ろう」

しかしまさかここがアニメの世界だとはな……。

タカシには関わらないって言ったけどはやての兄の時点でもう関わってるんだよねぇ。

あれ？　ってことは、はやての部屋にある鎖の付いたあの本は俗に言う二期に関係あるやつか！？

というか俺って魔力無いんだよね。

確かはやてが聞いた声ってユーノ？の声のはずだから。

俺には届いてない＝魔力無し。

てか、タカシがリリなの見て発狂してたのを俺ら3人で流し見しながら見てたぐらいだからあまり覚えて無いぞ…。

んでもってはやてに転生者ってばれました。どこで口すべったかなぁ。

でも生活に何も支障は無いです。アニメのこととか言ってないです。

言って原作に誤りが出たら大変でしょ？

まったく……俺の人生はいつまでも腐ってやがる。

第8話「妹の成長に喜べない…」

自分が転生者だからってやることはあまり変わらない。

決して外でサイドポニーで白い制服の少女を見かけたからって家に引き返してはいない。

家の洗剤が切れたからスーパーに行った時、金髪のツインテールの少女がそのスーパーに入って行ったからって別のスーパーには向かったことは関係ない。

ところで話は変わるけれど、前の世界で『シド』というバンドグループがあった。

それはもう俗に言うV系の中じゃあトップクラスだ。

まあ、Vとか隔てなく聴いてたから知ってるぐらいなんだけどな。

話を戻そう。

そのシドの曲の中に『妄想日記』『妄想日記2』という曲がある。

その曲はファンの中で結構人気のある曲だ。

ただ歌詞が…あれなんですよ。

怖いんです。

とある女が、一目ぼれした男を手に入れようとする歌詞なんだけど…。手段がまぁ…ねぇ…？

まあ題名通りそれは妄想なんだけどね。

一部の熱狂的なファンの方は多分興奮するんだろうけどさ…。

俺の場合はマジで経験あるから笑えない…。

マキが『ライブでこの曲やろう！』って言った時は顔が引きつったのを覚えてる。

サクラと健二も顔が引きつってたな。

まあ何が言いたいかっていうとね、はやてが興味を持っちゃったんだよ。

「この曲の歌詞ええな～」

そんな同意出来ますって顔しながら聴かないでくれ。

「兄ちゃん、この曲聴いてみたい！」

そんなキラキラした目で言われてもねぇ。

まあ…幸いシドの曲ならある程度は復元してあるから聴かせられるけどさ。

そんなわけで聴かせてみた。

結果、はやてが顔真っ赤になった。なんで！？

第８話「妹の成長に喜べない…」

ｓｉｄｅ　ｈａｙａｔｅ

４月〇×日

兄ちゃんは転生者らしい。
なんでそんなことが分かったかは兄ちゃんが『まさかタカシが転生者だったとは…』とか言ってたからや。
わたしが兄ちゃんに『転生者ってなに?』って聞いたら『な、なんでその単語が出てくる…!?』みたいに動揺しとった。
だって今自分で言うたやん…。まあそんな兄ちゃんの抜けてるとこ

がええんやけどな（はーと）

それで動揺しまくった兄ちゃんに今がチャンスや！　みたいなノリで畳み掛けたら自分が転生者だって言うてくれた。
まあ、どんな兄ちゃんでもわたしは大好きなんやけどな（はーと）

4月〇△日

兄ちゃんが前の世界の有名なバンドさんの曲のを聴かせてくれた。

なんでも今までずっと復元してたらしいで？
その曲数は余裕で千曲を超えとった。

兄ちゃんの好きなＲｏｏｋからさまざまな曲があった。
なんとかロゲっていう曲の欄があったけど兄ちゃんが見させてくれんかった。
必死に頭文字を隠してたけど『〇ロゲ』ってなんやろ？

それで兄ちゃんが持っとった曲の中にわたしのめっちゃ気に言った曲が2曲あった。

え～と、『妄想日記』と『妄想日記2』やったような…。

それを兄ちゃんに伝えたら固まったけどどうしたんやろ？

だってこの曲の歌詞最高やんか。
そんなこと言ったら兄ちゃんが『綾香…エミー…マキ…怖い』とか

呟きだした。

……誰やその女たちは？

っと、なんか一瞬自分が腹黒くなった気がするけど気のせいやな。

とりあえずこの曲が聴きたいって言ったら兄ちゃんが歌ってくれた。

初めてちゃんと兄ちゃんの歌を聴いたけどなんていうか…アレやな、凄いわ。

……そんな感想しか出ないけど兄ちゃんはやっぱ凄いんやなぁ。

あかん、わたしきっと顔真っ赤や。

第9話「いわゆるダイジェスト？」（前書き）

今回は短い＋内容も薄いです。
申し訳ないです；

第9話「いわゆるダイジェスト？」

はやてがあれ以来、音楽に夢中だ。
なんでも俺の歌声にハマってくれたらしい。
なんとも嬉しいことを言ってくれるが…。
はやてよ、頼むから『妄想日記』を歌わないでくれ…。
お前が歌うと怖いんだ…。

第9話「いわゆるダイジェスト？」

4月×△日

今さらながら原作の流れの再確認だ。
・現在1期の最中
・5月中旬に1期終了
・はやての誕生日に部屋にある書から守護騎士？　とやらが出てくる

・決戦はクリスマス

……覚えてるのこれだけって…。
タカシが発狂してそっちの印象ばっかだったからアニメの自体はそこまで見てないんだよな。

なんて無駄な作業だったんだ！
曲でも作るか……。

4月××日

今日は楽器屋でバンドメンバー募集の紙を貼って来た。
ホントは軽音部でも良いかと思ったけどやるなら本気でやりたい。

当然募集パートはギター、ベース、ドラムだ。
ギターが集まらないでも俺がボーカル&ギターやれば良いんだけどさ。

でも俺的にはボーカルに専念したいんだよなぁ。

ついでに他のところでボーカル募集してるところは無いか探してみたが条件が合いそうな場所が無かったからこの日は帰宅した。

4月×□日

そういえばこの世界は俺の世界で存在してたバンドも曲も無いんだよなぁ。
だから前の世界での曲を勝手に俺が作詞作曲したってことにすれば

…？

なんてよからぬことを考えた。

5月〇日

いよいよ原作も大詰めなのではないだろうか？
いや、見てもいないからよくわからないんだけどさ。

そういえば今日は翠屋に行ってきた。
タカシの小説をちょくちょく覗いてたときここの店のシュークリームが美味いって設定だったから興味本位で行ってきた。
ていうかなんでそんなところは覚えてるのだろうか…？　原作覚えてろって話だよなぁ。

ちなみにシュークリームは絶品だった。
おみやげに買って帰ってはやてに食べさせたらはやても美味しいと言ってた。

それと店員の女性は綺麗だったな…っは！？　なんだこの殺気は！？
なんかはやての部屋から向けられてる気が……。

で、でも！　はやての方が可愛いからな！

……殺気は止んだようだ。

5月〇×日

ボーカルはライブでの体力が基本だ。

綺麗な声、音程もそうだが何よりも体力が無いと意味がない。

そんなわけでいつもの早朝ランニングを行う。

今日は早目に出たから時間に余裕があるため臨海公園まで走ろう。

だが、近づくにつれて何か物凄い音が聞こえてきた。

……そういえば今日はいわゆるＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ回なのか。

うん……早く帰ろう。

臨海公園には寄らず早めに帰ることにした。

第9話「いわゆるダイジェスト？」（後書き）

次回からとりあえず本編に入る予定です。
上手く書けるかわかりませんがよろしくお願いします＾＾；

とりあえず夜中にでも1話あげられたらいいなぁ。

第１０話「Ａ'ｓ始まるよー」（前書き）

一生懸命Ａ'ｓ見直してる作者ですｗ
思ってたより内容覚えてないから困ったものだ。

これを気にｓｔｓに手を出そっかなぁ…。
まだ見てないんだよなぁ…。

第１０話「Ａ'ｓ始まるよー」

さあさあやって来ましたよ誕生日だよ！
可愛い妹のためだからおもいきってやったよ！
『プレゼントは兄ちゃんがいい』とか言ってきたけど無視したよ！
普通にオリジナル曲を歌ってあげたよ！
なんか不満そうにアヒル口になってたけど無視したよ！
てなわけでもうすぐＡ'ｓ始まるよー！

第１０話「Ａ'ｓ始まるよー」

はやての誕生日は正確には明日なんだが俺の都合で今日行うことにした。

都合とは？　まあ明日はバンドのセッション日で帰るのが遅くなってしまうんだよ。

「なんでわたしの誕生日に予定入れるん？」って怒られたよ…。

まあ本当はセッションなんか無いんだけどさ。

明日は確かなんだっけ…ヴォ…ヴォ…ヴォ？

そのなんていうか４人の騎士（一匹犬）が出てくる日だったはずだし。

それで明日はバタバタするから急遽今日行うことにしたんだ。

はやてにもちろんそんなことは教えられないから嘘を吐いたんだけどさ…。

怒ってた以上にめっちゃ寂しそうな目をしてたな…。

だから二人っきりの誕生日パーティは盛大にやった。

「でもホントに良いん？　一緒に寝てもらっても」

「はやてが言ったんじゃないか」

「だって最近一緒に寝てくれへんから…」

「大丈夫だから、ほら？　早く寝ちゃいな」

「じゃあ抱きしめてな」

「はいはい」

「♪」

はやてに嘘を吐いたことで申し訳なかったけどこうして笑顔になってもらえたからよかったとしよう。

明日は例の騎士たちが出てくるからな。はやてよ、原作通り頑張ってくれ。

もうすぐ0時回るしそろそろ寝るか……。

「兄ちゃん…なんかあの本が光ってんやけど？」

「え？」

はやてが指差した方には光り輝いている本があった。

やがてその書は禍々しいオーラを放ってこちらへ向かってきた。

「え、何なん？」

「ちょ……」

『Ｉｃｈ　ｅｎｔｆｅｒｎｅ　ｅｉｎｅ　Ｖｅｒｓｉｅｇｅｌｕｎｇ.（封印を解除します）』

「しゃ、喋ったぁ！？」

「えぇー…」

『Ａｎｆａｎｇ（起動）』

パラパラとページが捲られたさいにそんなことを伝えられた。

……まあ何言ってるかわからんけどさ。

何が起こってるかよくわからんがはやての胸から小さな球？　みたいなのが書に取り込まれた。

その後光が放たれた後そこに居たのは俗に言う騎士たちだった。

……てかさ。

「０時に丁度起動とか聞いてないし」

とりあえず横で気絶してしまったお姫様はどうしようか？

やれやれ…こんなの腐ってやがるぜ。

第１１話「病院パニック」（前書き）

納得のいけるように上手く書けず執筆速度が落ちておりますｏｒｚ

書いて削除を繰り返してばかり…。

「繰り返す、このポリリズム」的なノリでｗ

そんなわけで遅くなり申し訳ありません。

第１１話「病院パニック」

「闇の書の起動、確認しました」

「我ら、闇の書の蒐集を行い主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を」

「あのさ、はやてを病院に連れてかなきゃならないから退いてほしいんだけど？」

第１１話「病院パニック」

ｓｉｄｅ　ｈａｙａｔｅ

「良かったわはやてちゃん、なんともなくて」

「はい、なんや心配かけてもうたみたいで、すんません先生」

「それは良いのだけど…誰なのあの人たちは？」

「ふぇ？　…あ」

石田先生が指差した先には兄ちゃんと…４人の人が居た。

まず兄ちゃんに向かい合ってる桃色の髪の人は巨乳や。兄ちゃんが悩殺されんとええけど。

その隣に居る金髪の人も桃色の髪の人に比べれば無いけどそれでも充分やな。

またその隣には私よりも小さな赤毛の女の子が立っていた。

最後に我関せずと筋肉質の男の人がおった。

というか耳と尻尾が見えるけど…コスプレ？

「それに何か慎一君とあの人たちが何かを揉めてるみたいだし…一体どういう人達なの？」

その状況は兄ちゃんが必死で桃色の髪の人に何かを伝えてその当人は聞く耳持たんってな具合の表情や。

横に居る金髪の女性はちょっと状況に困ってるみたいやし、赤毛の子は暇そうにしておる。

男性の方は相変わらず我関せずを貫いてる。

まるであれやな、兄ちゃんが金髪の人と浮気して桃色の髪の人は兄ちゃんの妻。

女の子は…金髪の人の子供やな。男性は……弁護士？

そんで兄ちゃんが浮気したことを必死で弁解してる。
そんな状況に見える。

でもな？　兄ちゃん。
浮気はわたしも許さんで？

そもそも兄ちゃんがわたし以外を選ぶとか…これはもっと兄ちゃんにわたしの魅力を教えなければ…。

「あの…はやてちゃん？」

「ふぇ？」

「どうしたの？　何か凄く怖い顔してるけど…」

しまった、何か最近のわたしは思考が暴走する。
あの歌を聴いてから余計に兄ちゃんが他の女と話してるのも見たくないし、兄ちゃんに近づく女は嫌がらせしようとか思ってしまう。
例えばあの桃色の髪の人は―自主規制―とか―自主規制―してさらには…―『あ、主……？』…。

そんなことを考えとったら突然頭の中に声が聴こえた。
……それよりもまた暴走してもうた。
まずは石田先生への説明やな。

……どうしよう？

『ご、ご命令を頂ければお力になれますがいかが致しましょう…？』

「え？」

また頭に鳴り響いた声に思わず声を上げてしまう。

『し、思念通話です。心でご命令を念じて頂ければ…』

どうやらあの桃色の髪の人からしい。

何か顔が青ざめてる気がするけどどうしたんやろ？

それに声も何か怯えてるけど…。

『ほんなら、命令というかお願いや』

『……？』

『ちょっと私に話し合わせてくれな』

『はい』

「えっと、石田先生。実はあの人たち親戚で…」

「親戚？」

とても不思議そうな顔をする石田先生。

当然やな、私も思うわ。

「遠くの祖国から私の誕生日をお祝いに来てくれはったんですよ。

そんでビックリさせようと仮装までしてくれたのに、私がそれにビックリしすぎてもうて…なぁ？」

「あ、そうなんですよ！」

「その通りです」

わたしの説明に二人が話を合わせてくれる。

「ほ、ほんとなの？　慎一君？　何か揉めてたみたいだけど…」

ここや、兄ちゃんが話を合わせてくれるかどうかや。

『兄ちゃん、お願いや…話合わせてな…』

ｓｉｄｅ　ｓｈｉｎｉｃｈｉ

「だから！　俺ははやての兄だって言ってるだろ！？」

「その証拠がない」

「じゃあはやてに聞いてみろって…」

「貴様が主を騙してる可能性がある」

「め、めんどくせぇ…」

これがあれか？　忠実な騎士って奴か。
主以外の人間は信用しないってか？

とにかくこのわからずやを何とかしなければ…。
この横の金髪さんも微妙に困った感じだし、赤毛の女の子は興味無さ気だし、筋肉質の男は我関せずだし…てかその耳はコスプレか！？

とまあ思考錯誤していたら目の前の桃色の髪の人が…そいやまだ名前聞いてないな。

とにかく、いきなり顔が青ざめてきた。
はて…どうしたのだろうか？

「えっと、石田先生。実はあの人たち親戚で…」

「親戚？」

いきなり俺も聞いたこともない事を語り出す我が妹。

「遠くの祖国から私の誕生日をお祝いに来てくれはったんですよ。そんでビックリさせようと仮装までしてくれたのに、私がそれにビックリしすぎてもうて…なぁ？」

「あ、そうなんですよ！」

「その通りです」

俺はポカーン状態だったんだが突如この二人が話に合わせた。もしかしてあなたたちはノリ良い方でしたか？

「ほ、ほんとなの？　慎一君？　何か揉めてたみたいだけど…」

石田先生、むしろ俺が聞きたいくらいです。

『兄ちゃん、お願いや…話合わせてな…』

おや？　何か今はやての声が聴こえたような…気のせいか。

しかしどうすっかねぇ。この辺の展開とか正直分からん。

今だけでいいからタカシ来いよ。いやマジで。

『イェア”アァァーーッ！！』

ダメだ。やっぱり来ないでくれ。

あいつはだいたいタカシ＝発狂＝残念しかねぇや。

しかしどうしよっか、こんなに迷ったのタカシのエロゲ以来だ。

あいつの作るエロゲは何故か選択肢が多いから攻略のファイル覗かせてもらおうとしたら。

『人生に攻略方法なんかねぇんだよ！！』

って怒られたっけ、１時間くらい。

とまあ話が逸れたが、きっと話は合わせるんだろうな。そうじゃなきゃ物語進まなさそうだし。

「実はそうだったんですよー、なのにこの人達ときたら気合い入れ過ぎちゃってー、それではやてが倒れちゃったんですねー」

「じゃあさっきまで揉めてたのは……」

「いやもう、はやてが倒れるほどやるなっていう話ですよねー。ほんと困ったもんだー」

かなりカタコトで喋ってる気がするけどまあ大丈夫だろ。

結局俺たちは無事？　家に戻ることが出来た。

まったく、こんな流れは腐ってやがるぜ！

第12話「平和っていいよな」（前書き）

始めに2点ほど謝っておきます。

更新遅れてごめんなさいぃ！！

そして前回書いて頂いたグラムサイト2さんの感想を誤って削除してしまいました…。

せっかく書いて頂いたのに申し訳ありません……。

第１２話「平和っていいよな」

「とりあえず自己紹介が必要だろ？　俺は八神慎一１６歳だ」

「わたしは八神はやて９歳や、兄ちゃんの妻やってます」

「妻…ですか？」

「とりあえず後半は無視してくれ」

「はぁ…、私はヴォルケンリッターの将、剣の騎士シグナムです」

「私は湖の騎士シャマルです。主にサポート等を担当しています」

「…鉄槌の騎士ヴィータ」

「守護獣、ザフィーラです」

第12話「平和っていいよな」

「そっかぁ、この子が闇の書ってもんなんやね」

書を膝元に置いてはやてが言う。

「物心ついた時には棚にあったんよ。兄ちゃんは何か知らん？」

「さあねぇ、はやての部屋なんて滅多に入らないし…」

「だからいつでも入って良いんよ？　特に夜とか」

「……遠慮しときます。それよりも話戻そう」

はやてはほっぺを膨らましている。

……最近こういう仕草ぐらいしか可愛いと喜べないんだが…。

「とりあえずわかったことがあるんや。闇の書の主として守護騎士のみんなの衣食住、きっちり面倒みなきゃあかんいうことや」

どうしてかはやてさんはそういう理解をする。

「幸い住むとこはあるし、わたしと兄ちゃんは料理が得意や。それとみんなの洋服買うてくるからサイズ測らしてな？」

妙に手をわきわきさせて口元がニヤけてるけど気にすることじゃあないか。

そこからのはやての行動は早かった。

みんなをすぐさま連れ出しデパートへ向かった。

「じゃあ、はやては女性陣の頼んだぞ」

「えー…、兄ちゃん来ないんか？」

「行くわけねぇだろっ！？」

馬鹿なことを言いだしたはやてを彼女たちに任せて俺たちは男性物の服が売ってる場所へ向かった。

「しかし、ザフィーラだっけ？　お前さんかなりマッチョだよな」

あの時の格好のままだとアレなんで父さんの着てた服を着てもらってるんだが…腕の部分が破けそうだ。

「主を守る守護獣として当然のことです」

「まあ、生憎今回の主様にはそんな心配ない……っておい！　服破けてんじゃねぇか！！」

「む？」

心配していたことがすぐに起きた。

父さんが気に言ってた服は彼の筋肉によって引き裂かれていた。

「こりゃ大きめの買わないとなぁ」

「ですので私には不要とおっしゃっているではありませんか」

それは獣体形で居るからそう言えるのだろう。

でもな……。

「俺は動物苦手なの」

別に動物見て逃げ出すわけじゃないがあまり触れたいとは思わない。

「ですから私は守護獣……」

「んなのどっちだっていいよ！！」

めんどくさいので早く服を買おう…。

そんでもって服の買い物が終わったらもうすぐ夕飯なのでついでに食材も買っていった。

そして夕飯時……。

「ん…んっ…」

ヴィータの箸があまりよろしくない。

まあ使ったこと無いらしいからそれが普通なんだろうが、どうしてシグナムとシャマルはなんの問題もなく使えるのだろうか…？

それにしてもヴィータの箸使い見てたら小さい頃のはやてを思い出して何となく和んだ。

はやては箸とかフォークも苦戦してたから俺が食べさせてあげてた

なぁ。

……あれ？　もしかしてハメられてた？

そんなことはないと思いたい…。

第１３話「笑顔」

はやては今まで俺と共に寝てたんだが、最近はヴィータと寝るようになった。
これでようやく兄離れが少しでも始まるかと思ったら……。

「う～ん…にいちゃぁん……」

どうしてこの娘は俺のベットで寝てるのだろうか？

「そこは…だめやぁ…」

この妹はどんな夢を見てるんだ…？

一向に兄離れが改善されないはやての寝顔を見て俺はため息を吐いた。

第１３話「笑顔」

さてさて、ヴォルケンズがやって来てから大分経った。
あ、ヴォルケンズって名前は俺が呼んでるだけだから。本人たちの前で言ったら怒られるんで言わないけどね。

「騎士甲冑？」

いつも通り家で動物苦手改善のためにザフィーラとじゃれていたらシグナムが話を切り出した。

「ええ、我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません」

「自分の魔力で作りますから、形状をイメージしていただければ」

「う～ん、そっかぁ…。せやけど私はみんなを戦わせたりせーへんから…」

騎士甲冑ねぇ…。甲冑って単語を聞くとゴツい鎧のイメージしか思い浮かばないんだが…。

「そうや！　服はどうや！？　騎士みたいにかっこいい服！」

「ええ、何でも構いません」

「かっこいい服ね…ならといざるすにでも行くか？」

「といざるすって何だ？」

「おもちゃ売り場さ」

そして俺、はやて、シャマル、ヴィータの四人でといざるすに行くことになった。

「しかし、ここに来るのも久しぶりだな」

左右見渡せばぬいぐるみやおもちゃがズラーっと並んでいる。

父さんたちが死んでからからは来ることのなかった場所だ。

「こういう所にこそ、それっぽい材料があるはずなんやけど」

「ここに……ですか？」

ちなみに俺たちの配置は車椅子に乗るはやて、それを押すシャマル。

その後ろを俺とヴィータが歩いている。

「よくここで動物のぬいぐるみを買って兄ちゃんの部屋に置いた嫌がらせしたなぁ」

「お兄さんは…動物が苦手なんですよね？」

またも話がズレるが俺に対する呼び方はシグナムが兄上、シャマルがお兄さん、ヴィータが兄貴、ザフィーラが慎一殿となってる。

正直な話、兄上や慎一殿とか言われるとなんとなく恥ずかしくなるんだが…。

「うん、だからわたしが猫のコスプレをして部屋に突撃した時も兄ちゃんは逃げるんや」

「コスプレ……？」

「猫耳と猫の尻尾付けて猫手や首元に鈴をつけたら完璧や」

「は、はぁ……」

「そもそも兄ちゃんはなぁ…――――」

はやての暴走癖が始まってペラペラと俺に関する惚気を語り出した。

なんていうかシャマルよ、頑張れ！

「てかあいつは探す気が……ん？」

ヴィータの姿が見当たらないので辺りを見渡すと……後ろに居た。

「……」

割かし大きなぬいぐるみが陳列する中、後ろにちょこんとうさぎの

ぬいぐるみがあった。
ヴィータはそのぬいぐるみをジッと見つめていた。

「兄ちゃーん！　ヴィーター！　遅れてるでー！」

「ああ…」

「う、うん」

前を突っ走っていたはやてからお呼びがかかる。
そもそもお前が暴走してたせいもあるけどな。

「（まぁ…俺自身あんま金の使い道ないしな）」

はやてたちにちょっと遅れると伝え、ぬいぐるみを掴んで俺はレジへ向かった。

「えぇ、風やねぇ」

「そうですねぇ」

店を出た俺たち四人を迎えたのは風。
まだ夏も終わったばかりだが、どこか寒さを感じさせる風。それでも心地よい風だった。

「兄貴…これ何が入ってんだ？」

はやて、シャマルが前を行き、俺とヴィータがその後ろを歩いてる中。

ヴィータは自分の持っている紙袋のことを聞いてきた。

前を見ればまたはやてが暴走してる。

しかも不幸なことにシャマルまでもが洗脳されてしまった。

「お兄さん×ザフィーラもなかなか良いと思うのですが…」

「それならザフィーラ×兄ちゃんや！　兄ちゃんが受けの方が萌えるで！」

……なんか話が腐の方向へ向かってる気がするんだが。どうしてこうなったんだ!?

「兄貴？」

「ああ……開けていいぞ」

俺がそう言うとヴィータは立ち止まって紙袋を開ける。

「あ…」

小さな呟き。その驚いた目線にあるのは、ヴィータが眺めていたうさぎの人形。

驚きの顔からやがて満面の笑みに変わった。

「あ、ありがとう。兄貴！」

嬉しそうに述べられる感謝の言葉。
この笑顔を見られたら買って良かったと思う。
というかまだ心が綺麗だった頃のはやてに似てる笑顔だ。

「おう、大事にしろよ？」

「うん！」

未だに俺が攻めとか受けとかの口論を交わしてる腐った二人を眺めながら、俺たちは帰路に着いた。

第１４話「それが二次元クオリティ」

「ザフィーラよ！　お前は人間形態になるんじゃない！！」

「ですが…慎一殿は獣形態が…」

「いいからなるなぁ！！」

「主命令や！　ザフィーラ、人間形態になるんや！」

「御意」

「あ、てめぇはやて！？」

ザフィーラの見事な裏切りによりザフィーラは人間形態になった。

そして俺とザフィーラを見比べて盛り上がる腐の二人。

「兄上、主はやてとシャマルはどうしたのでしょうか…？」

「シグナム！　お前は頼むから染まらないでくれ！！」

「は、はぁ…？　ってシャマル何をするっ！？」

俺の願い空しくシグナムが腐の世界へ連れ去られてしまった。

次戻ってきた時にはシグナムは腐の住人となっているだろう。

「兄貴、大丈夫か？」

そう言って駆け寄ってくるヴィータ。

「なんかこの家で俺が信頼できるのはヴィータだけかもしれない」

「え？　そうか？　アタシが…えへへ」

ヴィータだけは一度腐の世界へ連れ去られたにも関わらず帰還することが出来た。

何でも『興味ねぇ』の一言で突っぱねたらしい。

「アタシが一番…兄貴がアタシを一番って…っ」

ただ顔を赤くしてたまに自分の世界に入ってしまう現象が起きてしまっている。

それが始まったのは俺がプレゼントしたあの日からだったな。

まあそれでも笑顔で可愛らしいから良いけどさ。

「しかしわずか数か月でこの家もカオスになったなぁー」

全てはあの日のはやての誕生日から。

俺とはやての二人きりだったこの家が今は六人となった。

「その点に関しては喜ぶべきなのかねぇ…」

いろいろと暴走することが多いはやてだがヴォルケンズがやって来てから終始笑顔だ。

俺の苦労が増えるばかりだけどはやてが笑っていられるなら…それ

も良いと思った。

――『プルルルルッ』

どうやら電話が来たみたいだ。

隣で俺と共にカオスな場を見ているザフィーラに一言伝えて俺は居間を出た。

第１４話「それが二次元クオリティ」

「3番テーブルのお客様にコーヒー二つとＢＬＴサンドを二つお願いします！」

「これ、2番テーブルのお客様に出してきて！」

「はい、了解です！！」

時間帯は正午。喫茶店が最も混む時間帯だ。
特にこの喫茶店は人気が高く、客の入りようもとんでもない。

「（というか…何故俺はこんな所に居るのだろうか…？）」

思いだすのは1時間ちょっと前、あいつから掛かって来た電話からだ…。

『もしもし？　なんだ凛？」

俺に電話を掛けてきたのは凛。学校でのクラスメイトだ。

『ゲホッゲホッ、ああ慎一か…？』

『お前風邪ひいてんの？』

電話口から聴こえる声は苦しそうな席と枯れた凛の声だった。

『ああ…ちょっとな…。それでお前に頼みがあるんだけど』

『……？』

『実は……』

凛の頼みを聞いてこの喫茶店『翠屋』に来た途端、制服に着替えさせられた。

なんでも今日は人手が少なかったらしく凛も急遽シフトを入れたのだが風邪をひいてしまい俺が代わりを務めることになったわけだ。

てか普通はこんなのダメなのかと思えばすんなりとオーケー。

まあそれほどまでに人手が欲しかったのだろう。

「八神君！　これを3番テーブルに！」

「あ、はい！　了解です！」

おっと回想してる暇なんてなかった。今はこの忙しさをどうにかしないと…。

「お、おつかれ～っす…」

15時過ぎ、ようやく客足が収まった。といってもまだ店内に客は居るんだが、一息つけるぐらいまでは落ち着いた。

「いやぁ～お疲れ八神君。助かったよ」

「朝霧くんが来れないって聞いた時にはどうなっちゃうかと思ったわ」

片付けた皿をキッチンの方へ持っていくと高町士郎さんと桃子さんが労ってくれた。

この二人は三人の子供を持つ夫婦だという。とても子供を持ってるようには見えない若さだ。

『それが二次元クオリティ』

……なんかタカシボイスで電波を受信したが気のせいだろう。

「八神くんだっけ？　ホントにこれがバイト初めてなの？」

そう俺に尋ねるのは高町美由希さん。
この人と桃子さん、そして士郎さんを見比べると兄妹にしか見えない…。

「ええ…バイト経験は無いですよ？」

あくまでもこの世界に限ってだが。

前の世界では楽譜代やライブ費用等で資金が必要だったからバイトをしてた。
そのバイト先はファミレスだったおかげで今回の忙しさもなんとかついていくことが出来た。

「ふむ…なら君もここで働く気はないか？」

「え…？　うーん……」

確かに高校に入ったからには何かしらバイトをしなきゃならないし…。

どうしようかと悩んでいると店に小さな女の子が来店してきた。

……あ。

店にやってきたのはいつかの少女。

高町なのはちゃんだった。

第１５話「自分のセリフには気をつけましょう」

朝、起床する。今日も良い天気だ。

朝はまず日課のランニングから始まる。そのためには着替えなければな…。

「勝手に次の日にしないでくださいっ！！　というより誰に言ってるんですか！？」

「……チッ」

第１５話「自分のセリフには気をつけましょう」

「あぁぁーーっ!?　あなたはーーっ!!」

店に入ってくると早々に声を荒げる少女。……一体誰に言ってるんだ?

「あなたですよ!!　夢追い人さん!」

「こ、こら!　そんな厨二病全開な名前は忘れなさい!」

「あなたが言ったんですよ!?」

ここまでの会話で分かったんだがこの子はなかなかの突っ込み属性を持ってんな。

「えーと、なのはと八神君は知り合いなのかな?」

「いや違いま――「うんっ!　この人が私に歌ってくれた夢追い人さん」――そ、その呼び名は…」

「おお、君があの『夢追い人』君か!」

「なのはがお世話になりました。『夢追い人』くん」

「泣いてる女の子に歌を歌ってあげるなんてやるねぇ『夢追い人』くん」

いやぁぁーーーっ!?

俺の黒歴史がぁぁーーっ!?

「いじわるした罰ですよ」

なのはちゃんがチロッと舌を出す。

やれやれ……まあ自業自得ってやつか。

「それはともかくとしてあの時はありがとうございました。え～と……」

「ああ、名前教えてなかったんだよな。八神慎一だ。慎一でいいよ」

「ありがとうございました慎一さん」

「うん、君もちゃんと笑ってるようだね」

あの時は何も考えずに『君が笑顔を忘れることが無ければ会えるさ』って言ったけれど、なのはちゃんはホントに笑顔を忘れずに俺との約束を覚えていてくれたのかもしれない。

「えへへ……ようやく言えました」

「その件については僕からもお礼を言わせてくれ、ありがとう」

「私も、親としてなのはを悲しませてしまったけれどなのはは笑っててくれたわ…ありがとう」

「ありがとね八神くん…いや慎一くんかな？　なのはが笑っていられたのは君のお陰だよ」

「あ、あはは……」

三人からお礼を言われて少し恥ずかしくなってしまいポリポリと頬を掻く。

「でもそれなら慎一くんはここでバイトをするべきだよ」

げっ…。美由希さんここでその話を持ってくるか…。

「え？　慎一さんここでバイトをするんですか！？」

キラキラと期待した目で俺を見上げるなのはちゃん。

……そ、そんな目をされると断れないじゃないか。

「じゃあその……よろしくお願いします」

こうして俺は翠屋でバイトをすることになった。

「ただいまー」

あの後もそれなりに働いて帰る頃にはとっくに日が沈んでいた。

「……」

「どうしたはやて？」

俺を出迎えたはやては何故か黙ったまま匂いを嗅ぐ仕草をする。

「兄ちゃんから女の匂いがする」

「なっ！？」

ちょっと待てはやて！　お前のソレは相当危ない！　主に俺の未来が！！

ついにはやてのあの三人みたいな思考を持ち始めた！？

『慎一君…ソノコダレ？』

『シンイチ？　とっても嫌な匂いが付いてるよ？』

『先輩、浮気は許しませんよ？』

思い出されるのはあの壊れた目、最近大人しくなったと思ったらやっぱり変わってなかった…。

「ヴィータ！　」

「おう、兄貴に近寄った女をぶっ潰してくるからな！」

ちょっと待てええぇぇーっ！？

あの綺麗だったヴィータが汚染されてやがる！？

しかも腐よりやばい方向に！？

「ま、待て！　待つんだヴィータ！！」

「兄貴」

俺の制止が利いたのかヴィータは立ち止まってくれた。

「兄貴に近寄る女はアタシが消してくる！」

とても素敵な笑顔で言われた！

この後説得には1時間かかった。そして俺の未来も前世と同じ方向へ向かってるような気がしてきたのは気のせいだと信じたい。

こ…こんな展開腐ってやがる！！

第１６話「届かない想い（前編）」（前書き）

今回は過去編です。

第１６話「届かない想い（前編）」

拝啓、田村綾香様へ

お久しぶりです。私、杉矢慎一こと八神慎一は新しい世界で暮らしております。
思えばあなたに殺されたあの夏の日の記憶も薄れかかってきました。

今だからこそ言いましょう。私はあなたのことが好きでした。

あなたは私が他の女子を見ていると思って気分を害されたようですがそれは私も同じでした。
あなたの容姿は１０人中１０人は確実に振り返る美しい容姿で他人でも友人と変わらない態度で接する。そんなあなたは男女関係無しに好意を持たれていたのです。

だからこそ数多くの男子から告白などを受けているあなたを見ていると私も不安で仕方ありませんでした。

あなたが私を手に入れたいがために何かしてきたことは薄々と気づいていました。
そんなあなたを安心させるために私はあなたに告白しようと決めました。
ですが…少し遅かったようです。それはきっと私の罪…。

だから…私はあなたを怨みません。そして今後もあなたを怨むことはありません。

殺された今でも…あなたのことが好きなのですから。
こんな私は変なのでしょう…。

でもそれが私の伝えたかった気持ちです。

願わくば…この想いが届きますように…。

第16話「届かない想い（前編）」

それはいつもの夜。みんなでタカシの家に集まっていた。

「だあぁぁぁーーっ！！　無駄にリアルすぎるんだよこのエロゲ！！」

画面の前に現れた『ＢＡＤ　ＥＮＤ』の文字。

それにやりきれず机を叩いて叫ぶ。

「なんでヒロインの好感度あげまくったらＢＡＤ　ＥＮＤなんだよ！？」

「あんまり上げ過ぎると引かれるからに決まってんだろが！！」

「今時そんなリアリティあるエロゲがあるか！？」

いつも通り俺たちはタカシ作のエロゲをプレイしていた。相変わらずながらこいつの作るエロゲは理解できない。

「あ、やべ。選択肢ミスった。前の選択肢に戻ろっと…って戻れねぇ！？」

「人生に右クリックがあると思ってんじゃねぇぞ！！」

「じゃあなんでセーブもロードもないんだよ！？」

「てめぇは人生にセーブとロードがあると思ってんのかぁ！？」

「これゲームだろ！？」

今選択肢をミスったのは健二。
今日はバイトが無かったためかこっちに来てる。

「馬鹿だなぁ～二人は、こういうのは攻略メモ見れば良いんだよ」

そう言うのはサクラ。フォルダ内の攻略メモのページを開こうとマウスを移動させる。

「って真っ白じゃん！？」

「人生に攻略方法なんかねぇんだよ！！」

そしてさっきから叫んでる残念野郎はタカシだ。
俺たちはいつも通りこの馬鹿な時間を楽しんでいた。

「なのはぁーーっ！！　イヤッホーーーッ！！」

魔法少女リリカルなのはを見ながら発狂するタカシをＢＧＭにして俺たちは来週のライブについての打ち合わせをしていた。
ちなみに現在は１期を見てるらしい。

「そういやさー慎一」

「ん？」

「いい加減誰にするか決めた方が良いんじゃねぇか？」

健二が切り出した話。それは恐らくあの三人のことだろう。

「フェイトキタぁーーっ！！　プレシアぶっ殺ーーっ！！」

「そうだね…早く決めないと姉さんが暴走しそうで怖いよ」

ちなみに決めるとかの話はもちろん誰と付き合うかってことだ。

しかし俺は三人に告白されたわけじゃない。

……だが態度と行動で分かっている。

三人は俺に好意を持っている。

……恐ろしいほどの。

「僕としては姉さんを選んでほしいな。兄さん？」

「スターライトブレイカーッ！！　うおおおおぉぉぉーーっ！！」

「誰が兄さんだ！？　まあ……答えは決まってるんだけどな」

「お、誰なんだ！？」

「気になるねぇ」

健二とサクラがズズッと身を寄せてくる。

タカシは相変わらず発狂。

「……綾香」

「スーパークロノターイム！！」

「おおー、やっぱり田村か。なんとなく予想はしてたけどさ」

「ちぇ、姉さんじゃないのか」

二人がそれぞれの反応を見せる。

「約束ーーっ！！　泣けるぅーーっ！！　2期行くぜぇーーーっ！！」

「んで？いつ告るんだ？」

「…明日にでも言おうと思ってる」

「やれやれ、ようやく慎一も落ち着いた相手が出来るんだね」

「はやてええぇぇーーーっ！！」

「お前たちならお似合いだしな」

「姉さんの説得は任せてね」

「まあ…なんつーかありがとな」

この騒動に関しては二人にも迷惑をかけてるわけだし一応礼を言っておく。

「とにかく明日頑張れよ」

「応援してるよ」

「ああ…頑張るよ」

「うおおおぉぉーーーーっ！！」

最後までタカシはうるさかった。

「ふあ～ぁ…」

退屈な授業がチャイムと同時に終わりを告げる。

今日俺は…綾香に告白する。

しかしいざ告白すると決めると緊張する。

最初はどうやって話を切り出そうとかどこで告白しようかなどの不

安が頭をよぎる。

「ん？」

そんな時だった。ポケットの中の携帯が震える。

どうやらメールを受信したようだ。

『今日の放課後、学校の屋上で待ってて下さい』

メールはマキからだった。

それにしても屋上って…？

とマキのメールの理由を考えているともう一件メールの受信を告げられた。

……エミーだ。

『今日の放課後、屋上で待ってて？』

そういえばいつもならエミーが真っ先に俺の所へ来るはずなのに今日は来ない。

「……考えてもしょうがない。行くか…」

それにあいつらにも伝えないと…。

俺はお前らの想いに応えられないって…。

あとはどうやって綾香に告白するか？

これから起こることも知らずに俺は屋上へと向かった。

第17話「届かない想い（後編）」（前書き）

グロになりきれてないグロ表現あります。

第17話「届かない想い（後編）」

――俺はお前が好きだ

――私はあなたが好き

――どうして…

――どうして…

――俺たちは…

――私たちは…

『すれ違ってしまった（の）？』

第17話「届かない想い（後編）」

屋上に行くとメールをくれた二人の女の子が待っていた。

「待ってたよ…シンイチ」

「よかった…先輩来てくれたんですね」

二人は手を後ろに組みながら少し俺に近づいてくる。

……何か様子が変だな…？

「あ、ああ…それで何の用なんだ？　二人とも」

俺は極めて冷静に二人に尋ねる。
……すると二人の表情に影が落ちる。

「シンイチ……綾香に告白するんだって？」

「……っ！」

「サクラが言ってたよ」

どうやらサクラは説得に失敗したみたいだ。
エミーの表情を見れば一目瞭然だ。

「私は…聞いていたんですよ？　これで」

マキはポケットから何かの機会を取り出す。
……あれはなんだ？

「これは盗聴器ですよ先輩。　先週私がプレゼントしたペンダントに仕込んであります」

「なっ……！？」

先週マキが『これを私だと思って肌身離さず付けててくださいね？』と言って渡されたこのペンダント…まさか盗聴器だったとは。

「酷いなぁ…シンイチは…」

「これじゃあ私たち…失恋じゃないですか」

俯きながら一歩ずつ近寄ってくる。

これは…何というか…ヤバイ。
少なくとも今までみたいに説得とか出来る状況じゃない…。
「だから私たち…決めたんですよ」
すると二人は動きを止める。
「ここでライバルを消せば良いんだって」
組んでいた腕を離して前に持ってくる。
その手にあるのは……ナイフだ。
「ここで残れば…先輩を手に入れられる」
「なんでこんな簡単なことに気づかなかったんだろうね？」

――ふーん、良いこと聞いちゃった

この屋上には二つ入口がある。

俺が入って来たのは東口。そして西口からやってきたのは…綾香だ。

「ここであなたたち二人を殺せば慎一君が手に入るんだ～…」

にこやかな笑顔でこちらに歩いてくる。

そしてその手には…ナイフがあった。

「丁度良かった…あなたも殺そうと思ってたんですよ」

「探す手間が省けたね」

そして三人は三角形の状態で向き合う。

……風が吹いた。

そこからは惨劇だった。

互いが互いにナイフで斬り付け合う。

しかも三人は笑顔だ。

飛び交う血、切り裂かれる肉。

正気の沙汰じゃない。

やがて一人が倒れた。

倒れ死んだ塊に二人は目をやらない。

ただ目の前に居る相手目掛けてナイフを振りかざす。

それはどのくらいの時間だっただろう。

永遠とも思える時間。

でも実際は対して時間は経っていなかった。

「私の勝ち…」

ポツリと呟かれた言葉。

残ったのは綾香だった。

「なあ…おかしいってマジで」

今までの光景を見てようやく出せた言葉。

「どうして…？　何もおかしくなんてないよ…？」

その言葉を綾香は否定する。

彼女の横で死んでいる女性二人。

――エミー…マキ…

その二人の死体を綾香はまるで石ころのように蹴る。

「ねぇ慎一君…どうしてそんな悲しそうな顔してるの？」

とてもおかしそうに彼女は言う。

「お前こそ…どうしてそんなに笑ってるんだよ？」

彼女はくすりと小さく笑って…。

「だってようやく邪魔者を消せたんだから嬉しいに決まってるよ」

とても綺麗な笑みで彼女は笑う。

「慎一君だって…嬉しいでしょ？」

――嬉しい

――大好きなお前が俺のために邪魔な二人を消してくれたんだ、ありがとう

――これから俺たちはずっと一緒だ

……そんなことを言えたらどれだけ楽になれるだろうか。

だが……俺の口からは…。

「人殺しと一緒に居て嬉しいわけねぇだろ…俺の前から消えろ」

そんな言葉しか出なかった。

「……もういいや」

笑みを消し彼女は無表情になる。

その目はさっきまで殺し合いを繰り広げたあの目と同じだ。

「そんなこと言う慎一君なんて…死んじゃえ」

これは…俺の罪…。

彼女たちの想いを受け止められなかった俺の罪…。

後のことがどうなったのか分からない。

ただ分かるのは…俺が死ぬ間際に。

綾香が泣いていた。

あの時…初めて出会った頃のように…。

泣かせてごめんな…綾香…。

第１８話「危機」（前書き）

お待たせしまくって申し訳ありません。

今7後の展開に行き詰ってしまい気づけば9月…。

本当に申し訳ありませんでした。

第１８話「危機」

変なところで神経がすり減りつつも楽しい日々。
ずっと続くと思ったその時…。

その日々は終わりを告げる。

「命の…危険？」

第１８話「危機」

それは突然だった。

俺たちはいつもの定期検査の為に病院へ訪れた。
検査結果の後、石田先生は俺に話があるという事で、はやてたちを待合室に残して俺と一緒についてきたシグナムは石田先生は別室に向かった。
そして石田先生が扉を閉めて俺たちに伝えたのは……。

「命の…危険？」

「ええ……」

「そんな…」

はやての命が危ないということだった。

「はやてちゃんの病気は…原因不明の神経性麻痺だと伝えたわよね？　それが…この半年で麻痺が少しずつ上に進んでるの…。この２ヶ月は特に顕著で……、このままでは内蔵機能の麻痺に発展する危険があるかもしれない」

「……」

「私も…なんとかしてあげられるよう原因を探します。だから…あなたたちは、はやてちゃんを…寂しがらせないであげて」

俺は……返事することが出来なかった。

廊下を出た後、俺はシグナムにこのことを他の3人に伝えるように頼んだ。
シグナムはそれを聞いてくれてみんなを連れて外へ向かった。

「兄ちゃん…そんな辛そうな顔してどうしたん？」

「な、なんでもないぞ……」

俺ははやてから目を逸らしてしまう。
正直…どんな顔を向けていいのか分からないからだ。

「嘘や、兄ちゃんは嘘をついとる」

「……」

「兄ちゃんが私に嘘を吐くときは必ず目を逸らすんや」

「よく見てるな…」

「だって兄ちゃんが大好きやもん」

そう言っていつものように抱きついてくる。
ホントに…どうしてこの子が…。

「はやての足の麻痺が少しずつ上に上がって来てるみたいなんだ」

今度ははやてに悟られないように、目を逸らさないことを意識した。

「でも、上がって来てると言ってもほんの少しだそうだ。だからまぁ…あんまり心配しなくていい」

本当のことは絶対に言えない。
むしろ言えるわけがない。

「そっかぁ…。でも、しょうがないわ、こればかりは…」

少しだけ寂しそうにはやては笑った。けれど…。

「さあ帰ろう？　帰って晩御飯作らんといかんなぁ～…」

そう言ってはやてはもう一度笑った。今度はいつものように…。

「ああ…」

俺は……耐えられるのだろうか？
妹が…死ぬことに。

「どうしろってんだよ…くそっ！！」

あの日から1週間が経った。

はやてはこれまで通り振る舞っている。

……いや、これまで以上に明るくなっている。

本当は辛いはずなのに、治るどころか悪化しているなんて…。

だからこそはやてはいつも以上に明るくふるまっているのかもしれない。

その変化は嫌でも気づく、ずっと一緒に居たんだから…。

けれどヴォルケンズは気づいていない。

いつもどんな些細なことでもはやてのことなら気づく4人が気づいていない。

それどころか何か余所余所しい。

まるで……はやてに対して後ろめたさを隠すように。

「俺が転生者だってこと…喋らなければ良かった」

俺が神様にもらった、たった一つの能力。

あれを使えばはやてを助けることが出来る。

でもはやては…。

『そんな大事な力をそう簡単に使っちゃダメや！　その力は兄ちゃんが本当に大事な時に使ってな？』

と言って断ってしまった。

俺からすれば今がその大事な時なのに…。

何度説明をしてもはやては首を縦に振らなかった。

「こんなことにならちゃんと原作を見とくんだった…」

この物語を知っていれば、俺がどう動いてはやてを助ければいいのか対策を練れる。

けれど俺は原作を知らない…。

「あ、アンタは…」

「…ん？」

声がしたので前を見るあげると。

「タカシか」

「タカシじゃないって言ってるだろ！？」

相馬一弥くんが居た。

第１８話「危機」（後書き）

今後も更新は遅くなると思いますが…頑張って書いていこうと思います。

この小説では全員ヤンデレにする予定でしたが、少し変えるかもしれません。

今後ともよろしくお願いします！

第１９話「プライドなんて捨ててやる」（前書き）

１６話からずっと暗い話が続いてますが…おそらく次回から明るくなると思います。

第１９話「プライドなんて捨ててやる」

第１９話「プライドなんて捨ててやる」

「なんでアンタ…そんな悲しそうな顔してるんだよ」

「いや…なんでもないさ」

「嘘だね、僕にそんな嘘は通じない」

この子には関係ない。だからこそ俺は嘘を吐いた。
けれど相馬くんには通じなかったようで、さらなる追及が来る。

「アンタ自身はどうなっても興味無いけどそんな顔をされたらはやて、それになのはも悲しむ」

「なのはちゃんが？」

「…気に入らないけどなのははアンタのことを相当気に入ってるみたいだよ」

驚いた。なのはちゃんとはそんなに話していないんだけど、どうやら好意的に見てくれてるらしい。

「大方これから翠屋バイトだろ。アンタがそんな顔して入ってきた

らなのはは悲しむに決まってる」

「……」

そうか…俺は今相当ひどい顔をしているようだ。
でも…はやてが……。

……！

「な、なぁ、君はこの物語の結末を知っているんだろ？」

「ん？　あ、あぁ…」

「俺は…この物語がどうなるのか知らない…だから…頼む！」

「お、おい！？」

地面に頭と手と膝を付ける。そう土下座だ。
俺は今、相馬くんに土下座をしている。

「お願いだ…はやてを助けてくれ！！」

「や、止めろよ。こんな所で…」

通り過ぎる人たちが何事かとこっちを見る。
それもそうだろう。高校生が小学生に土下座をしているんだ。
それでも構わない…っ。
「君には力があるんだろ!?　物語に介入出来る力が!!」
タカシが書く主人公だ。相当強いに決まってる。
「その力で…頼む!　はやてを…助けてくれ!!」
「……」
「俺には魔法の力なんて無い、けど君にはあるんだろ!?　お願いだ…その力はやてを助けてくれ…っ、そのためだったらなんでもする」
プライドなんて関係ない。
はやての命が助かるなら俺はそんなちっぽけなもん捨ててやる。
ボーカルの夢だって諦めてやる。
「俺の大切な…たった一人の妹なんだ…っ」
気づけば泣いていた。

side kazuya

僕の目の前で土下座をしている男。

僕は最初この男が大嫌いだった。
オリ主で素敵なハーレムを作ろうとした僕の夢をぶち壊してくれた。
小さい頃、ずっとなのはと一緒に居てなのはの心は僕の物だと確信し始めた矢先、いつの間にかなのははこの男に夢中になっていた。

「すっごく歌が上手だったんだよ」「夢追い人さんがわたしを勇気づけてくれたの」「名前…知りたかったなぁ」

なのははあの男を語る際にいつもこんなことを言う。

これはもう完全に惚れていると思って良いだろう。
僕はきっとユーノと同じように友達としてしか見られてないんだろう。

そしてきわめつけにははやての兄だ。

もうふざけてるとしか言いようがない。

原作でははやてが一番好きなキャラだったのに…。
しかもはやてはこの男に惚れてるときた。

これでまたハーレムの夢は遠くなった。
アリサとすずかにいたってはニコポとナデポが効かない。
原作に関係ない女子は全員くらうのに何故…？
もしこれでフェイトまでこいつに惚れたら僕の原作人のハーレム大作戦はおしまいだ。
そんなわけでこいつのことが嫌いだ。
けれど…。
「お願いだ…はやてを助けてくれ！！」
「や、止めろよ。こんな所で…」
「君には力があるんだろ！？　物語に介入出来る力が！！　その力で…頼む！　はやてを…助けてくれ！！」
通り過ぎる人たちは何事かとこっちを見る。
その視線は物珍しそうに、馬鹿にしているように。
けれどやがて興味を失いどんどん去って行き、僕とこいつだけが取り残される。
「俺には魔法の力なんて無い、けど君にはあるんだろ！？　お願いだ…その力はやてを助けてくれ…っ、そのためだったらなんでもする」
それでもこの男は土下座を続ける。
恥ずかしいとは思わないのだろうか？
プライドはないのだろうか？

小学生相手に土下座をしているんだぞ？
僕だったら死んでも出来ない。
なのに…なんでこの男は出来るんだ？
その答えは…。
「俺の大切な…たった一人の妹なんだ…っ」
…泣いてる八神慎一の顔を見てなんとなく理解できたような気がした。

side shinichi

「わかったよ…」
「……え？」
「僕が…助けてやるさ」
その一言を聞いて俺は…相馬くんに抱きついた。
「うわっ、抱きつくなよ！　僕は男なんて興味無いんだ！！」

「ありがとう…本当にありがとう…」

「分かったから抱きつくなって…」

あまりにも嫌そうな顔をされたので離れることにした。

「勘違いするんじゃないぞ、僕は自分のハーレムのためにやるんだ」

「ハーレム？」

「まあそれはいい…とにかく！　僕が助けてはやてを振り向かせるんだからな！」

そう言って相馬くんは華麗に去って行った。

「……よかった」

これで少し落ち付けそうだ。

けど、相馬くんに頼り切るわけにもいかない。

俺は…。

「いつも通りに接しよう」

きっとそれがいい。

ふっきれた自分にもう迷いはなかった。

第２０話「いつもの日常」（前書き）

ちょっと大事なお知らせがあります。
詳しくは活動報告を見てもらえば分りますが、この小説での歌詞のことについてです。

第２０話「いつもの日常」

「えーと…必要な物はこれで全部揃ったよな。あと足りないものはあったかな？」

「にいちゃんの私に対する愛や」

「特になし、と」

「あたしアイス食いたい」

「私は兄ちゃんに食べられたい」

「アイスな。あんま食い過ぎんなよ？」

「兄ちゃんが私に冷たい…」

第２０話「いつもの日常」

【八神家での場合】

「私は最近思うんや！　兄ちゃんは私に対する愛が足りない」

「いきなり何言ってんだお前？」

俺がはやてに対する態度を改め、いつも通りの日常を過ごすように意識してから数日が経った。
最近はヴォルケンズたちも普段通りのの形に戻っている。相変わらずこそこそと何かやってるのは変わらないが。

「たった一人の妹なんやからもっとこう…大事にせんと」

「それは人の膝の上に座って言うセリフなのか？」

「そんな当たり前のこと愛のうちに入らへん！」

当たり前って何だよ…。これって当たり前のことなのか？

「それにここ最近ある女の子の匂いが兄ちゃんにずっと付いておる。バイトがある日に限って！」

「それはあたしも感じるぞはやて！」

「年齢は恐らく私と同じくらいの子や！」

はやてはマキみたいな事を言いだすし…。

ヴィータもそれに感化されてる気がする。

あの頃の綺麗なヴィータを返して下さい。

「な、なるほど…これが修羅場という奴なのか」

「いえ、こんなことじゃ甘いわシグナム。もっとこう…ドロドロした感じの…」

「む、むぅ…？」

シグナムに限ってはシャマルに色々教え込まれてる状況。

ああ…なんて恐ろしいことを。

もはやこの家での味方はザフィーラしか居ないのかもしれない。

でもそれはそれで腐の方向へ向かうから頭が痛い。

…俺の日常ってこんなんだったっけ？

【喫茶店「翠屋」での場合】

「そんなわけで最近妹が怖いんだよ」

「そもそも慎一さん、妹さん居たんですか？」

「ああ、はやてって言うんだけどね。会う機会があればよろしく頼むよ」

「はい！」

本日はバイトの日。けれど今は休憩中なのでこうしてなのはちゃんと喋っている。

「ところでさ…」

「はい？」

「なんで膝の上に座るの？」

「この方が心地良いからです！」

「はぁ…」

何故かなのはちゃんと喋る時はいつもこの体制なのだ。

本人いわく上の通りなんだけど…。

ていうかこのせいではやては匂いとか分かるのか？

……なのはちゃん良い匂いするしなぁ。

そして先ほどから…いや、いつものことなんだけど。

高町夫妻＋美由希さんの温かい目線
恭也さん、相馬くんの射殺すような視線。
凄く気になるんです。

特に恭也さんは視線の強さが尋常でない。
まるでシスコン…。何故思っただけで視線が強くなる!?
いつか俺はこの人に殺される日が来そうだ。
俺の人生は殺される以外で終わらないんですかねぇ？

「えへへ」

以上の視線を受けてなのか分からないがなのはちゃんは嬉しそうに
俺の両手を握る。
形からすればなのはちゃんを抱きしめてるようにしか見えない。

そしてまた恭也さんの視線が鋭くなる。

俺、明日には死んでるかもね。

【友人の集まりでの場合】

「そんなわけなんだが…どう思う？」

「死ね、リア充」

「爆発してよ、リア充」

「お前らひでぇ！？」

本日はバンドの集まりで、ツヨシの家に集合している。

「てかロリコンだったかお前、引くわー」

そう言うのは朝霧凛。
うちのバンドのベース担当。

「今が夏だったら打ち上げ花火にしてあげるのに」

笑顔で嫌なことを行ってくれるのは相沢良哉。
こいつはドラム担当である。

「リア充言うけどな、相手は妹みたいな娘だぞ？　普通にありえないっしょ」

「とか言ってますよ、良哉さんや」

「そんなこと言ってしっかりフラグは立てていくんですねぇ、凛さん」

「こいつら…っ」

俺はロリコンじゃないからな？
たしかになのはちゃんに甘えられるのは嬉しいぞ、最近のはやては可愛くないことばっかりするから。
綺麗だったヴィータも消えてしまって、今じゃなのはちゃんだけが俺のオアシスだ。

…なのはちゃんははやてに会わせないようにしよう。そうしよう。

『イェア”アァァーーッ!!』

「…で？　今度はあいつ何見てんの？」

「『あの日読んだ本の名前を僕達はまだ知らない』だっけ？」

「確か今日が最終回だってさ」

丁度こちらの部屋にもテレビがあるので付けて見てみる。

「どこにも発狂するシーンが見当たらないんだが」

どう考えても発狂するようなアニメではない。

「まあツヨシだし」

「そうだね」

結局いつも通りの流れ。これが俺の『いつもの日常だ』

オリキャラ紹介2

名前：相馬　一弥
職業：小学生
趣味：ハーレム活動

テンプレ転生者。魔力はＳＳＳ
ニコポ、ナデポを持っているが何故かモブにしか効かない。
本命ははやて。根が腐っているが決して悪い奴じゃない。

「僕のハーレムがあぁぁっ！？」

名前：朝霧　凛
職業：高校１年生
趣味：バイト

慎一のクラスメイトでありバンドのベース担当。
翠屋のバイトもこなしている。慎一のよき理解者。

「死ね、リア充」

名前：相沢　良哉
職業：高校１年生
趣味：運動

ドラム担当。学校は違うが慎一たちと付き合いが長い。

「爆発してよ、リア充」

名前：ツヨシ
職業：ニート
趣味：ゲーム、発狂

前の世界のタカシ的存在。

「イェア”アァァーーッ！！」

第２１話「やっとA'ｓ1話じゃん…俺は誰に言ってるんだ?」（前書き）

アニメを見ながら書いてますのでどうしても会話文が多くなってしまう…。
もう少し文才あればなぁ…。

第２１話「やっとＡ‐ｓ１話じゃん…俺は誰に言ってるんだ？」

今日は毎週恒例となっている、はやてを図書館に連れていく日だ。
俺もはやても本が大好きだからな。こうして毎週本を借りに来る。
シャマルやシグナムも一緒についてきて本を借りている。中身が腐の方向の本だったことは思い出したくない。

……てか何故図書館にそんなものがあるんだ？

第２１話「やっとＡ‐ｓ１話じゃん…俺は誰に言ってるんだ？」

そろそろ5時になる。シャマルとシグナムは今日は外を回るとのことで後ほど合流予定。図書館には俺とはやてだけ。
てなわけでそろそろ帰るからいつもの集合場所に向かったんだが…
どこ行った？

「あ、いたいた兄ちゃ～ん」

「ん？」

一度、入口の所へ戻って来てみるとはやてが居た。
いつもの場所に居ろと言ったのにどうしてここに居るんだよ…？
そしてその横には紫髪の女の子が居る。

たしかあの子は…。

「兄ちゃん遅いで」

「お前が集合場所に居なかったせいだと思った俺は悪くないはずだ」

「あ……」

こいつ忘れてやがったか。はやてにしては微妙なうっかりだ。

「ごめんねはやてちゃん。私と喋ってたせいで」

「いやいや、すずかちゃんは悪くないわ、妹の場所を感じることが出来ない兄ちゃんのせいや」

なんだよ感じるって…？　お前、そんな得体の知れないものを会得してんのか？

「当たり前やんか！」

「人の心を読むんじゃない！？」

そして隣に居るこの子はたしかすずかちゃんだ。バイトの時、なのはちゃん達と居るんでよく見たことがある。

「はやてちゃんのお兄さん…でいいんですよね？」

「うん、八神慎一って言うんだ。君はよく翠屋に来る子だよね？」

「あ、はい。姉がお世話になってます」

「姉…？」

「私、月村すずかって言います。姉の名前は忍って言うんですけど…」

「あぁ～。忍さんの妹さんか」

どうりで誰かと似てると思ったんだが、忍さんの妹だったのか。ちなみに忍さんは恭也さんの恋人でたまに翠屋を手伝いにくる。俺はその時、たまたま話したことがあるくらいだ。

「兄ちゃんが私をほったらかして他の子と喋ってる」

「他の子って…お前の友達じゃないのかよ？」

「それとこれは話が別や！」

「意味わかんねぇよ！？」

非常に理不尽だ。どうして俺がここまで言われなければならない。

「ふふっ、お姉ちゃんに聴いた通り面白い人ですね」

「あ、そう…？　ていうか忍さん俺のこと何て言ってんの？」

「内緒です」

「えぇー…」

「乙女の秘密は男にそう喋れるものやないでぇ。まぁ、兄ちゃんになら私の秘密とか喋ってもええけど」

「はやて、頼むから黙っててくれ」

「ふふっ」

すずかちゃんと分かれ、その後俺たちは待ってた二人と合流した。

「はやてちゃん、寒くないですか？」

「うん、平気。シャマルも寒ない？」

「私は全然」

「もう12月だしな、風邪には気をつけろよ？」

「いざって時は兄ちゃんに頼むから平気やなぁ」

「そこはシグナムに任せるわ」

「わ、私ですか？」

いつもと同じ何気ない会話。この時間が俺の大好きな時である。

「晩ご飯、シグナムとシャマルは何食べたい？」

「ああ、そうですね、悩みます」

「スーパーで材料を見ながら考えましょうか」

「うん、そやね」

寒いし、鍋とかでもよさそうだ。
すき焼き等もいいかもしれない。

「そういえば、ヴィータは今日もどっかお出かけ？」

「あーえっと、そうですね」

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラがついていますのであまり心配はいらないですよ」

「ここ最近、特に出歩く回数が増えているよな。ヴィータも元気だな」

俺なんか言えに閉じこもってたいくらいだ。
子供は風の子とも言うし、そんなもんなのか？

「でも・・・少し距離が離れても、私達はずっとお二人の側にいますよ」

「はい、我らはいつでも、お二人の側に」

「…ありがとうっ」

「（なんつーか…照れる）」

頬に当たる風が温かく感じるのは照れているからではないと信じたい。

第２２話「一人じゃない」

第２２話「一人じゃない」

「～♪　～～♪」

「（その歌を口ずさむんじゃない…）」

はやてが料理しながら口ずさんでいるのはお馴染みのあの曲。
だからお前が歌うとマジで怖いんだって…。

「～♪　あ、電話や、もしもし？」

恐ろしい歌をはやてが口ずさんでいると携帯がが鳴って歌が止まってくれた。

『あ、もしもしはやてちゃん？　シャマルです』

「どうしたん？」

『すみません、いつものオリーブオイルが見つからなくって…。ちょっと遠くのスーパーまで行って探して来ますから』

「あ、別にええよ、無理せんでも・・・」

『出たついでにみんなを拾って帰りますから。お料理お手伝い出来なくてすみません』

「ふふっ、平気やて」

『なるべく急いで帰りますから』

「別に急がんでええよ、気をつけてな」

電話を切って、ため息を吐く。

「シャマル？」

「うん、帰るの遅れるって」

「ああ、またか…」

こうして買い物に向かったシャマルが帰りが遅くなるというのは珍しいことじゃない。ここ最近、それが特に多い。

「ちなみに理由は？」

「いつものオリーブオイルが無いんやて」

オリーブオイルね…。そんなに減ってたっけか？

「みんな、何か隠してるなぁ…。兄ちゃんは知らん？」

「さぁ？　別に隠し事くらい良いんじゃないか？」

まあ恐らく原作関連だが…。何をやっているのかは俺もよく知らないので嘘は言ってないはずだ。

そしてはやては料理の準備が終わったのか、手を洗ってこっちへ来た。

「お疲れさん」

「うん、お料理が冷める前に帰ってくるとええなぁ」

はやてをソファに降ろしてあげ、二人で肩を並べて座る。

「こうやって座ってるとカップルみたいやなぁ」

「仲の良い兄妹の間違いだろ」

「兄ちゃんはもう少し素直になっても良いと思う」

「お前はもう少し自重してくれ」

最近、はやての扱いかたに慣れてきた。これも成長なのかね…？こんな成長は望んでなかったけどさ。

「最近…家に二人で居ること多いな」

「うん…新婚さんみたい…あたっ！？」

「まったく、自重しろって言ってんだろ…」

言っても分からないので、デコピンをしてやった。

「でも…こうして兄ちゃんと二人でいるとシグナムたちが来る前を思い出すなぁ」

「そうだな…半年前まではずっと二人だったもんな」

やけに家が静かに感じてしまう。
この家はこんなにも静かだっただろうか？

「なんか…怖いんよ、みんな居なくなってしまいそうで…」

「はやて…」

「まるで…みんなが居たことが嘘みたいに感じて…」

「大丈夫だ」

はやての言葉を遮る。

「誰も居なくなったりしないって」

「うん」

「少なくても俺はお前の側に居てやる」

「一生？」

「それだけは言わん」

それを言ってしまったら完全に終わってしまう。主に俺の人生が。

「ケチ。でも…ありがとう」

珍しく素直に甘えてくるのでそれに答えて撫でてやる。
原作だと俺は当然居ない。
そうなるとはやてはこの広い家に一人きりになる。
そのことも考えていつもより優しく撫でてあげた。

「夕方に言った私の秘密聞きたい？」

「…なんだよ？」

「昨日の兄ちゃんのアイス食べたの私…きゃう！？」

「お・ま・えなぁ～っ！」

やっぱりいつものはやてだった。

第２３話「フラグ乱立とか言ってる意味が分からんぞ」（前書き）

警告メールが来ましたので、歌詞が載ってる話を編集いたしました。

第２３話「フラグ乱立とか言ってる意味が分からんぞ」

第２３話「フラグ乱立とか言ってる意味が分からんぞ」

「おはようございま～す」

今日は昼から翠屋でのバイトが入ってるので時間に合わせて出勤した。

「あら、八神くんおはよう」

「おはよう八神君」

ちなみに何故おはようなのかと言うとバイトでは出勤した時はほとんどの所が昼夜問わず『おはようございます』が挨拶だからだ。

「どうも、こんにちは」

そして士郎さんと桃子さんと話してたらしいであろう翠色の髪の女性が挨拶をしてきた。

「あ、こんにちは…。えーと、この人は…？」

「ああ、こちらの人はフェイトちゃんのお母さんのリンディさんだよ」

「リンディ・ハラオウンと言います」

「あ、どうも…俺は八神慎一って言います。フェイトちゃんて…あのビデオレターの？」

なんでも外国に住んでる子のようでなのはちゃんの友達らしい。
何度かそのビデオレターを見せてもらったことがある。

まぁ…初めて見た時はエミーに似すぎててびっくりしたけどな…。
はやてとなのはちゃんもそうだが…、やっぱり似すぎているだろうと感じた。

「しかし…本当に子持ちですか？　失礼ですけど全くそんな風に見えませんけど…」

「あら？　これでも１４歳の息子も居るのよ？」

「えぇー！？」

１４って…俺と二つしか変わらないぞ。
とてもじゃないが子持ちだとは信じにくい。
桃子さんと言いこの世界はマジで腐ってやがる！

「そうだ、慎一くんもフェイトちゃんに挨拶してきたらどうだい？」

「え、でも仕事中ですよ？」

「飲み物のお代わりを持って行ってくれれば問題ないよ」

「はぁ…、じゃあ挨拶してきますね」

まぁ、俺も挨拶くらいはしておきたかったし…これくらいは問題はないだろう。

キッチンに行って人数分の飲み物を注ぎ、キッチンを出た。

外に出るためには入口から出ないといけないのでそこから出る…のだが。

「きゃっ！」

「うおっ！？」

俺がドアを開けたと同時に金髪の女の子が入ってきたので交錯する形になった。

しかしそれでは終わらない。

右手に飲み物を乗せたお盆が、バランスを崩したせいで手から離れる。

そしてそれが女の子の方へと向かっていく。

このままでは確実にこの子にかかる。

俺は倒れそうになっている身体を踏ん張りながら左腕で女の子を思い切り抱き寄せた。

もちろん一度離れてしまったコップたちは戻ることなく落下し…。

とても響きのよい音が店に響いた。

ガラスのコップが地面にぶつかり、中身が散乱。ついでにコップも割れて同じく散乱。

…やっちまった。

幸い店内にはお客さんが居なかったので、迷惑がかかることは無かった。

まぁ、問題は後片づけが面倒ということか…。

「あ、あの…」

「ん？」

声のする、俺の胸の方へ顔を向けると女の子が物凄く申し訳なさそう、そして赤い顔でこっちを見ていた。

「ああ、ごめんね。ジュースがかかっちゃってない？」

「大丈夫ですけど…その…」

物凄く言いづらそうに下を向いてしまう。なんか物凄く萌えるんですけど…。

「えっと…「早く離れてーっ！！」」

「ごおっ！？」

凄く強い力で引き剥がされる。
俺を引き剥がしてくれたのは…なのはちゃんだった。

「むぅ～っ！」

何故か凄い恨めしそうに睨まれている。

「「あらあら」」

「おやおや」

そしてこの状況を見守ってたであろう、大人三人組がこちらを見てニヤニヤしている。

一体何がどうなっているんだろうね…？

第２４話「鈍感だな……あれ、俺のこと？」（前書き）

物凄く今更なことですが…、ノリで書いてます！
そんなわけで前の話と矛盾が生まれないようにするのが大変ですｗ

以上、どうでもいい作者の愚痴でした！

第２４話「鈍感だな……あれ、俺のこと？」

「あの…何て言うかごめんね？」

「え、ええと…」

「もっとちゃんと謝ってください慎一さん！　もう二度とこんなことしませんってくらいに！」

「どうしてなのはちゃんがそこまで怒ってるのか疑問なんだけど…？」

第２４話「鈍感だな……あれ、俺のこと？」

あの後、面倒な後片付けを済ませて、俺は外にテラスに来ていた。
なんでも士郎さん曰く「これも仕事の一環だよ」とのこと。

「あぅ…」

「むぅ～っ！」

一人は照れて、もう一人は睨んでくるこの状況。
俺に一体どうしろと言うのかね？

「（フェイトって男の人に免疫ないんだっけ？）」

「（うん…クロノさんとさっき制服を持って来た人以外は）」

「（それであんな風に助けてもらって尚且つ抱きしめられちゃあねぇ…）」

「（なのはちゃんも大変だね）」

俺たちから少し離れたところで何やら話してるアリサちゃんとすずかちゃん。
何を話してるかは知らないが…まぁ、これ関係だろう。

「ほら、なのはも機嫌治しなって」

「ふん！」

この状況を見かねた美由希さんがなのはちゃんを説得してくれてるけど効果が無い。美由紀さんは苦笑していた。

「あんたロリコンだな」

「そんなこと言わないでくれよタカシ君」

「タカシじゃないって言ってるだろ！（くそ…フェイトまで取られてしまった…）」

しかしまぁ…この状況はどうすればいいのかね？

「とりあえず…大丈夫かな？」

「は、はい…」

それから３０分後くらい。ようやくフェイトちゃんが目を合わせてくれるようになった。

なのはちゃんの機嫌は未だに治ってないけど…気にしないことにしよう。

「えっと、とりあえず自己紹介でもしようか。俺は八神慎一って言うんだ」

「わ、私はフェイト・テスタロッサです…」

ぺこりと可愛らしく頭を下げる。なんかこの子の仕草一つ一つに萌えてしまう自分は決してロリコンではないと信じたい。

「何度かビデオレターで見たことはあるけど…一応初めましてということで」

「あ、はい。なのはから色々聞いてます」

「色々？」

「なんでも…「わー！　わー！　フェイトちゃん！」だとか」

なのはちゃんが途中で遮ってしまったので何言ってるのか分からなかった。

「えっと…なんでもないですよ！」

「はぁ…」

とりあえず気にしてはいけないことらしい。

「それよりも慎一さん！　飲み物のお代わり持ってきてください！」

「いや、でもまだなのはちゃんの機嫌が…」

「わたしのことはいいの！」

「あ、はい…」

なのはちゃんが怖い…。女の子は自分の知らない間に怖くなっていくんですね。
追加分の飲み物を持ってくるために店内へと戻った。

「やぁ、おかえり」

「なのはの機嫌は治った？」

飲み物を取りに戻った俺を出迎えてくれたのは大人三人。

「いや、なんでも飲み物が欲しいとか…」

「なのはちゃんも乙女ですねぇ」

「いえいえフェイトちゃんこそ」

「？」

何を話してるのか分からなかったためスルーして飲み物を取りに行く。
そして行きと同じように入口のドアへ向かう。

「（…本能が告げている。避けろと）」

ドアを開けると同時に本能に逆らわず俺は右に避けた。
それと同時に外からなのはちゃんが勢いよく店に入ってきた。

「…あれ？」

店に入ったなのはちゃんは何かを探しているのかキョロキョロして
店内を見渡して、壁際に移動していた俺を見つけた。

「あー！　なんで慎一さんそこに居るんですか！？」

「なんでって…本能が…」

というか、避けて良かったのだろう。
避けなかったらさっきのフェイトちゃんと同じ現象が起きたのだか
ら。

しかしなのはちゃんは納得できないとばかりに怒り始める。

……何故？

大人三人はさっきと同じように微笑ましく笑っていた。

第２５話「トラウマ再発」

「はぁ…はぁ…」

一定のペースで町中を走る。
これは俺が日課にしてるランニングだ。
将来ボーカルとして飯食ってくには体力つけないといけないしな。

「はぁ…ふぅ…」

そんなわけで無事に家に着き、本日のランニングは終了。

さて、シャワーでも浴びるか…。

第２５話「トラウマ再発」

シャワー浴びて、制服に着替える。
今日の授業の準備も出来たっと…。
みんな忘れてるのかもしれないが俺は学生だぜ？
…俺は誰に言ってるんだろうな。

「おはよー」

「あ、兄ちゃんおはよう」

いつも通り、はやては俺たちの分の朝食を用意してくれている。
前は俺も手伝ってたんだが、高校に上がってからははやてに任せっきりになってしまっている。

「あれ、シグナムたちはまだ寝てんのな、珍しい」

これまたいつも通り部屋に戻らず、ソファで寝ているシグナム。
俺が来るころには起きてるはずなんだが、今日はまだ寝ているようだ。

「（しかしまぁ…綺麗な寝顔だな）」

シグナムは言わずとも美人だ。そしてシャマルも。
はやてとヴィータは美人というよりも可愛いという部類に入る。
ザフィーラに限ってはイケメンだし…。
この家って容姿に恵まれてんのな。

……俺を除いて。

そんなわけでまあ、シグナムの寝顔には見とれてしまうものがある。

「兄ちゃん、それ以上見とれてたら刺すで？」

「おいおい、冗談はよして…く…れ…」

振りかえった俺が見たものは、はやてが笑顔で尚且つ包丁を握りしめている姿だった。

あ、あれ…？　何故か綾香に殺されたあの場面を思い出したぞ…。

トラウマ再発によってシグナムが目を覚ますまで動けなかった…。

「ふぅ…朝は酷い目にあった」

まさか、あのシーンを思い出すことになるとは…。
はやてがマキみたいになってくのは、もう止められないのだろうか…？
嫌だな…それ…。

「おや、前に居るのは…？」

よく見たことがある二人。

なのはちゃんとフェイトちゃんだ。

「おーい、二人とも～！」

声を上げると同時に、自転車のベルを鳴らす。
その音で二人は振りかえり、笑顔でこっちを向いた。

「おはよう、慎一さん」

「あの、おはようございます」

「うん、おはよう」

俺は自転車から降りて、二人と同じように歩き始める。
二人はスクールバスの停留所に向かってるようで、そこまで一緒させてもらうことにした。
「フェイトちゃんは今日から初登校なんだっけ？」
「あ、はい。緊張してます…」
「にゃはは、そんなに緊張しなくても大丈夫だよフェイトちゃん」
どうやらあまり人前に出ることが慣れていないようで、すっかり緊張しているようだ。
「でもなのは、みんな知らない人ばかりだから」
「まぁ、人類皆元を辿れば家族だから大丈夫だって」
「それは遡り過ぎだと思うの…」
「そっか、家族と思えば…」
「フェイトちゃんが真に受けてる！？」
こういうフェイトちゃんみたいな子は天然って言うんだろうな…。
そういえばエミーも最初こんな感じだったんだっけ。
…それが何故あんな風になってしまったんだろう。

「慎一さん、震えてどうしたんですか？」

「い、いやなんでも…」

「なんで、私から離れていくんですか…？」

フェイトちゃんに寂しそうな顔をされた。

だって…朝に続き二度目のトラウマだからねぇ…。

第２６話「我が家の容姿の平均値が高すぎる」

「来たよロリコン」

「やぁ、ロリコン」

「何故会って早々そんなことを言われなければならないんだ」

第２６話「我が家の容姿の平均値が高すぎる」

昼休み、凛と良哉の三人で飯を食うため食堂に来たが、会ってロリコンと言われました。

「このロリコンまじありえねーって！　なのはちゃんだけじゃなくフェイトちゃんまで毒牙に掛けやがった」

「はやてちゃんとヴィータちゃん、なのはちゃんでは飽き足らず出会ったばかりの子に…、慎一は本当に手が早いですねぇ」

「とりあえずお前ら後でぶっ飛ばす」

どうやら凛は昨日は翠屋でのバイトだったらしく、先日のことについての話を出してきた。

一応説明しておくけど俺はロリコンじゃないからな？

あの４人は残念ながら恋愛対象として見れんからな。

…特に幼馴染に似てる3人は。そしてはやてに限っては妹だからな。

それよりもシグナムやシャマル…でもこの二人は家族だしな。

美由希さんとか…可愛いよね。

はっ！　なんだこの、主に家の方角からくる殺気は！？

しかも一つだけじゃなく二つも感じる。

「いきなり震えだしてどうしたの？」

「な、なんか殺気感じないか？」

「…感じなくね？」

「うん」

おかしいなぁ…、まるで俺を他の女には渡さない的な嫉妬を込められた視線が突き刺さってたんだけどなぁ…。

「てか今さらだがお前の家って美女揃いだよな」

「なんていうか恵まれてるよね…慎一以外」

「うるせぇよ!?」

お前に言われんでもこないだ思ったことだよ!

「つーか俺ってそんなブサメンか？　自惚れてるつもりは無いけど人並みにはあると思ってるんだが」

「いや…そんなことは無いと思うけど…なんでそんな落ち込んでんの？」

「もしかして僕、ちょっと言い過ぎた？」

こないだ自分で思ったことを友人にまで言われちゃ落ち込みもするさ!

どうせ俺はブサメンですよー。我が家の容姿レベルを引き下げてますよー。

「あ、拗ねちゃった」

「まぁ…一応こいつって悪くないと思うけど、こいつの家とか翠屋の人たちと比べると霞むよな」

「というか海鳴市って容姿に恵まれてる人多いよね」

どうせ俺なんて…どうせ俺なんて!

「んじゃ、今日もツヨシの家集合で、泊まりだから着替え忘れんなよ？」

「分かってるよ、じゃあな～」

「じゃあね」

学校が終わり、後は帰るだけだ。

この後は、はやてを病院に連れて行って、その後は夕飯の準備のために買い物に行く予定だ。

今日はすずかちゃんが晩御飯を食べに来てくれるらしい。恐らく泊まりだろうけど…。

「（珍しくはやても上機嫌だしな…）」

はやてはここ数日元気がなかった。といってもほんの少しだが。

理由はみんなに隠し事されているからだろう。

けれど今日は皆に絶対に帰ってくるようにと伝えてあるから、久しぶりに全員そろっての夕飯になる。

「（かくいう俺も少し舞い上がってるけど）」

なんだかんだで俺も家族と言う存在に飢えていたんだなと思った。

だからこそ…今夜のことは許すことが出来なかった。

第27話「約束」

俺とはやては足の検査のために病院へ訪れていた。

「うーん…やっぱりあんまり成果が出てないかな～…」

「……」

「でも、今の所副作用も出てないし…もう少しこの治療を続けましょうか」

「はい、えーと…お任せします」

「お任せって…自分の事なんだから、もうちょっと真面目に取り組もうよ」

「あ、いや、その…私、先生を信じてますから」

「……」

石田先生ははやての満面の笑みを見て、何も言えなかった。そりゃまあ、信じてますとか言われたらなぁ…。

その後はやてには外に出てもらい、俺が病室に残った。

「はやてちゃん、日常生活はどう?」

「足の麻痺以外は…健康そのものですね」

「そうなのよね…、身体の麻痺以外まったく異常が見当たらない…」

「後は…俺に対して包丁を持ち出すのを止めて欲しいですね」

「そう、いつも通りね」

いつも通りって…、先生そりゃないぜ！？

「今はなるべく麻痺の進行を緩和させる方向で進めるけど…。これから段々と入院を含めた辛い治療になります」

「…わかりました」

「けれどこういう治療が続く時、支えになれるのが家族の存在。はやてちゃんを…寂しがらせないであげて」

「はい」

第27話「約束」

病院の帰り、夕飯の買い出しのためにスーパーへと足を運んでいた。

「楽しみやね、兄ちゃん」

「ああ、そうだな」

いつも以上に嬉しそうなはやて。ここ数年でマキみたいになってきたけど…やっぱりまだまだ子供だ。

「今夜はすずかちゃんも来てくれるし、お肉はこんなもんかな？」

「そうだな、それだけあれば充分だろ」

「外は寒いし、今夜はお鍋やね」

「鍋か、はやての作る鍋は美味しいから楽しみだな」

そういえば、はやてとこんな風に買い物したのも久しぶりだな。ヴォルケンズが来てからは、シャマルが基本付き添ってたからな。

「それにしても兄ちゃん…今日はどうしてもアカンの？」

「ああ、悪いな」

何がダメかというと、俺は今日飯を食ったらツヨシの家に行く。しかも泊まりがけでな。

理由はというと、明日、隣町のライブハウスが開催するライブに参加する。

それで、打ち合わせのためにツヨシの家に泊まり込み。
まあ、さらに言えば…ツヨシは俺らのバンドのプロデューサーみたいなもんで打ち合わせするにもツヨシの家が手っ取り早いからそうなった。

「う〜ん、そっか。バンドは兄ちゃんの夢やもんね」

「ほんとにごめんな」

「ええよ、でも浮気はアカンからな？」

「浮気って…」

そんな出会いは求めてないから大丈夫だって…。
ていうか俺はそんな相手が見つかるのかね？

「はぁ〜、寒いなぁ」

「はやて、寒くないか？」

「うん、大丈夫。せやけど…」

はやては暗い夜空を見上げて…。

「みんなも…外で寒ないかな〜…」

ここには居ない家族達を心配していた。

「みんな遅いなぁ～…」

鍋は出来た。すずかちゃんも来た。
後は食べるだけ…のはずなんだが。

「そうだね…どうしたんだろう？」

肝心のあいつらが帰ってこない。

「…っ、だめだ。シャマルの奴、携帯を家に忘れていきやがった」

さっきから何回か携帯にかけたんだが…シャマルの部屋から着信音が聴こえた。つまりあいつは携帯を忘れていったということだ。

「携帯を忘れるって…なんのための携帯電話だよ…」

「シャマルはうっかり屋さんやなぁ」

しかし…このままじゃ鍋も冷めちまうし、すずかちゃんも待たせるからな…。

仕方ない…。

「なぁ、すずかちゃん。頼みがあるんだが」

「はい、なんですか？」

俺ははやてをすずかちゃんの家に泊めてもらうように頼んだ。

非常に申し訳なかったけど、すずかちゃんは快く受けてくれた。

後は…あいつらはいつ帰ってくるんだろうねぇ？

第２８話「それでも家族なのかよ！？」

『なぁ、シグナム、あいつらの将…だったっけ？　そのお前に一つだけ守ってほしいことがあるんだけどさ』

『何でしょうか、兄上』

『あ～…、まだその呼び方慣れねぇな…。まぁ、それはいいとして…』

『？』

『これだけは守ってほしいんだ。はやてとした約束を破らないって』

『約束…ですか？』

『ああ、絶対にな。頼みぞ！』

『誓います、騎士の剣にかけて！』

『…そこまでかしこまれると恐縮するから止めてくれ』

第２８話「それでも家族なのかよ!?」

「はぁ…間に合わなかったか…」

息を切らして帰って来た４人。
まぁ、急いで帰ってきたことは褒めてやるか。

全員がリビングへ入ったのを確認して部屋の電気を付ける。

「「「「っ!?」」」」

「よぉ、お帰り」

驚く４人。誰も家に居ないと思ってたんだろうから驚くよな。

「あ、兄上…、今日はご友人の家に行かれたのでは…」

「それはいいから、とりあえずお前ら座れって」

4人をソファに座らせる。ちょいと狭そうだがそこは我慢してもらう。

「さて、はやてのことだが…今日はすずかちゃんの家に泊まってもらうことになった。お前らの帰りが遅いせいですずかちゃんに迷惑かけるわけにもいかないからな」

「も、申し訳ありません…」

「待てって、まだ謝らなくていい」

この段階で謝ってもらっても困るんだよな。

まだまだ言いたいことがあるんだし。

「こないだ、はやてはなんて言ったっけ、シャマル」

「え？　あの…今日は絶対に時間通りに帰ってくるように言いました…」

「正解」

はやてにしては珍しく『絶対』を付けたんだったな。

「それで…お前らは時間通りに帰ってこれたか、ヴィータ」

「帰ってこれなかった…」

「そうだな」

約束の時間からもう2時間も過ぎてる。ご立派に遅刻ですねぇ。

「そんで話は変わるけどお前らは確か守護騎士、だったっけ？　そしてはやてはなんだっけザフィーラ」

「主です」

「そうそう、でもはやては主なんて扱われ方嫌だって言って、お前らになんて扱ってほしかったんだっけか、シグナム」

「家族…です」

「そうだ」

ここまでの経緯を振り返ってみた。

まぁ…俺が何を言いたいかっていうと…。

「お前らは家族の癖に約束の一つも守れんのか？」

もう今さら、なんで遅れたのか言わない。どうせ原作関連なんだ。

まぁ、この約束が破られるのは原作関連のうちに入るんだが…。

それでも俺は言わずにはいられなかった。

「マジでおかしいんじゃねぇのお前ら？　何考えてんの？　馬鹿なんですか、死ぬんですか？」

ああ、だめだ。

俺、この世界に来て初めてキレてる。

「家族が約束破るってどうなんだよ！？　しかもただの約束じゃねぇぞ、はやてが『絶対』って言った約束だぞ！？」

「「「「……っ」」」」

４人が驚愕している。そら驚くわな。俺だって驚いてるし。

「守護騎士っつーのは絶対の約束すら守れない集団なんですかねぇ！？」

「そ、それは…」

「言いわけなんか聞く気はねぇぞ！？　俺が聴きたいのはな！　ど・う・し・て！　約束を破ることが出来たんだってことだ！」

「…ぅ」

恐らく弁解をしようとしたであろう、シグナムを遮って俺は怒鳴った。

もうここまで行けば俺の自己満足みたいなもんだ。

「どうせ守れるはずなかったんだろ!?　なのにどうして受けた!　どうしてあの子に希望を持たせた!?」

気づけば俺は少し泣いていた。
この涙で少し頭が冷えたのか、熱くなってた思考を押えて喋ることにした。

「…俺はな、はやてに対して一度も約束を破ったことが無い。それが俺の唯一出来る自慢だ」

はやてに対して嘘は何度でも吐いたことはある。
といっても傷つけるような嘘は言ったことないが。

「俺は絶対に約束は破らなかった。そりゃあ、理不尽な約束だってあったさ。『結婚して』だとか『キスしてだとか』」

…自分で言っててなんか悲しくなってきた。俺ってマシでこの空気向いてねぇな…。

「そんな守れそうもない約束は全部断ってきた。だって約束は破りたくないからな」

守れもしない約束なんてするだけ無駄。破ったらはやてを傷つけるだけ、だったらしない方がマシだ。

「何が言いたいかわかるか?　はやてはな、約束を破られるってこ

とに慣れてないんだよ」

「「「「っ！！」」」」

ようやく俺の言いたいことが理解できたようだ。
まぁ、遠回しになったけどさ…。

「身体の麻痺で思うように動けないことにも慣れた、父さんと母さんが死んでから寂しいのも時間をかけて慣れてきた、けれど！　約束を破られることだけはあの子は慣れてないんだよ！！　その意味がわかるな？　お前らは今日、家族であり主でもあるはやてを悲しませるっていう最低なことをしたんだよ！！」

俺が伝えたかった、たった一つの気持ち。
『はやてを悲しませた』
この重みを分かってほしかった。

涙を拭いて、もう一度４人と向き直る。

「…もう一度聞くぞヴィータ、今日お前たちはなんの約束をした」

「…っ、今日は…っ、絶っ…対に帰るって…っ、約束…した…っ」

ヴィータはもうボロボロ泣いている。

「シャマル、それをお前たちはどうした」

「約束を…破りました…」

シャマルも目に涙を溜めている。ハンカチで拭いても止まることは

ない。

「ザフィーラ、はやてはどんな気持ちだと思う」

「とても…落胆したに違いありません」

ザフィーラは泣いてこそいないが、悔しそうに傾いたままだ。

「シグナム、俺はお前になんて頼んだっけ？」

最後にシグナム。胸に手を抑え、空いてる手は色が変わるくらいに握りしめている。

「主との約束を…破らないようにと仰りました…」

「そういうことだ、まったく…ちゃんとはやてに謝れよ？」

「はい…っ」

全員が心から反省をしてるのを見て、俺はようやく笑みをこぼした。

やれやれ…俺にこんなキャラは似合わないっての。

今日も腐った世界は動いてる。

第２９話「死んだらそれまで」（前書き）

もうすぐ物語も終盤ですね。
上手く書けるか分りませんが、なんとか完結させられるように頑張りたいと思います＾＾

第２９話「死んだらそれまで」

「だからもうちょっと待ってくれって、用事済ませたら行くから」

『早く来いって言ってんだろうが！！』

「なんでお前がそこまでキレるんだよ！？　意味わかんねーよ！！」

『イェア”アァァーーッ！！』

「日本語喋れ、日本語」

第２９話「死んだらそれまで」

「おう、終わったか？」

「あ、兄上、主が兄上に代わって欲しいそうです」

「ん？　俺？　りょーかい」

ツヨシとの電話を（勝手に）済ませて、リビングに戻ったら今度は俺と代わって欲しいとのこと。

『あ、兄ちゃん？　みんなを怒ったんやって？』

「ん？　あぁ…まぁな」

『みんな怖かったらしいんよ？　ヴィータなんか電話越しでも泣いてたで？』

「そりゃ、怒ってるからなぁ…」

俺の場合、怖かったんじゃなくびっくりしただけだろ。
一度も怒ったこと無い奴が怒るとビビるもんだぞ？

え、違う…？

俺は怖くなんてないよ？

『みんなきっと兄ちゃんの男らしいとこ見てメロメロやで！　私も怒ってもらいたいなぁ』

「これだけは言いたくなかったんだが言うわ…お前の頭の中腐ってんな」

『失礼な兄ちゃんやな、とりあえず明日帰ったら私にも男らしいとこ見せて襲ってくれてもええんよ』

「あ、電波が悪いでせいでよく聴こえない！　アーアー！」

『んもぅ…兄ちゃんの馬鹿』

馬鹿と言われて切られてしまった。くだらんことを言うお前が悪いんだろうが！

「ったく…まぁいいや、飯にしよーぜ」

４人が帰るのを待ってて俺も飯食ってないんだよな。
あー…腹減った。

ツヨシ？

待たせとけばいいんだよ。

「あの、兄上…」

「ん？」

「聞いて欲しいお話があります」

どうやら飯を食えるのはまだ先のようだ。

「なるほどねぇ…魔力を蒐集して本を完成させると…」

「はい」

俺が聴かされた話は…。

シグナムたちがここ数日、魔力を蒐集する活動を行っていること。
これをやらなければ、闇の書とやらがはやてを浸食していてこのままだとはやての命が危ないとのこと。
闇の書を完成させればはやては助かるとのこと。
もちろん人から魔力を蒐集することは犯罪であること。

まぁ、こんなもんか。

「だからここ数日、家に帰るのが遅かったのか」

「はい、申し訳ありません」

「もちろん、時間通り帰還出来るように計画を立てて居ました。けれど今月辺りから管理局という組織に妨害を受けるせいで…」

「管理局ねぇ…警察みたいな奴か」

そりゃ犯罪者が居るんだからそれを取り締まる組織はあるだろうな。
ていうか、これが原作関連なのね…。今さら知った俺ってなんなのかね？

「そして、もう一つ…。私たちは主との約束を破っているのです」

「なに？」

その内容…はやては闇の書の完成を望んでなく、収集活動をしないと約束をしたらしい。
けれど、闇の書を完成させなければはやての命は無い。
だからこそ、俺たちに黙って活動をしていた…。

「てことは既に二つも破ってんのか」

「いえ、兄上とした約束も含めれば三つになります」

「ああ、そうだったっけか。う～ん…なるほどねぇ…」

ｓｉｄｅ　ｓｈｉｇｕｎａｍｕ

私たちは既に三つの約束を破っていた。
主と交わした約束、兄上と交わした約束。
そして今日の約束…。

三つも破っている私たちは騎士と呼べるのだろうか？
自分たちが…情けなかった。

「処罰を受ける覚悟は出来ています」

「処罰って…」

処罰と言われて兄上は困っている。兄上も主と同じで優しいお方だ。

…先ほどは怖かったが。

「てかさ…、これについては怒る気ないんだけど？」

「は…？」

「え…？」

「な…？」

「…？」

兄上の出した答えに私も含めた皆が驚く。
何故だろうか、約束を三つも破っている我らを…。

「いやまぁ…約束を破ったことあれだけどさ、お前らは、はやてを助けるためにやってくれてるんだろ？　だったら感謝はしても怒ることはないんじゃねぇの？」

「で、ですが…っ」

「このままじゃ死ぬはやてを想ってのことだろ？　それにこれはお前らにしか出来ないことなんだからさ」

「兄上…」

言葉がなかった。どうしてこれほどまでの優しいのだろうか。だが、ヴィータは納得出来ないとばかりにテーブルを叩く。

「でも！　あたしたちのやってることは絶対に許されねーんだ！　それなのに…っ」

「そんなの関係ないって」

「は…？」

「家族の危機を家族が助けようとしているんだ。どこに怒る要素がある？」

「「「「……」」」」

「そりゃあ、認められた行為じゃないさ。けれどはやてのために必死に戦う事を俺は否定できねぇよ」

「そ、そうだけど…」

「だから思う存分やってくれ、はやてを助けるために。俺からのお願いだ」

その言葉に…私、いや…私たち４人は救われた気がした。

誰がどう見ても私たちは認められるような行為をしていない。
非難されることは覚悟できていた。
主はやてが助かるならどれだけ非難されようとも…。

けれども…兄上は非難されなかった…。

「何故…兄上はそこまで仰るのですか？」

だからこそ、私は訊いた。

「…死んだらさ、何も出来ないんだよ…。好きな人に想いを伝えるとかさ」

「兄上…？」

「死んだらそれまで、その先は無い。それに俺ははやてに生きてて欲しいから…それじゃダメか？」

兄上の目には、主はやてを想う優しさと…。

他の誰かを想う悲しさが浮かんでいた。

第３０話「どっちがいい！？」

あの日から数日、とりあえず４人はこないだよりはやての側に居ることが多くなった。

こないだの件を引きずってなのかもしれないが、はやてが嬉しそうなので良しとしよう。

ちなみにあの後、ツヨシの家に行って合流したけどツヨシがずっとキレててうざかった。
ひたすら発狂してたし、打ち合わせどころじゃなかった。

あ、ライブは成功したけどね。

まぁ…そんなわけで落ち着いてる…。

「絶対こっちが良いよ！」

「違うよ、こっちのだよ！」

お、落ち着いてる…はず？

第３０話「どっちがいい！？」

学校が終わって帰り道。今日は夕方からバイトだが、まだ時間的には余裕があるのでいつもと違う道から翠屋に向かうことにした。

そこで携帯ショップの前で見知った顔を見つけた。

「あれ、リンディさん…ですよね？」

「あら、八神君ね。お久しぶり」

「お久しぶりです」

ショップの前に居たのはリンディさんだった。

どうやらフェイトちゃんが携帯を買うらしく、それの契約の為に来てるらしいが、まだ決まらないらしい。

そのため、リンディさんは外で待ってたとのことだ。

「俺もそろそろ携帯変えたいな…」

俺の使ってる携帯は既に2年契約を過ぎている。そろそろ機種変更しても良いんじゃないだろうか。

「だったら八神君も一緒に見てきたらどうかしら？」

「そうですね、そうします」

そうして俺は店の中へと入って行った。

店内に入ると、様々な携帯が置いてあった。
この店自体はそんなに大きくないが、種類は結構豊富らしい。

「あ、慎一さん」

いろんな携帯を見渡していると、なのはちゃんが俺に気づいて声を掛けてきた。

「やぁ、なのはちゃん。それにみんなもこんにちは」

後から続いてやってきた。フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんと挨拶を交わす。
どうやら一弥君は諸事情で居ないらしい。

「フェイトちゃん、携帯は決まったのかい？」

「はい、これにしようかと」

フェイトちゃんが持ってるのはデザインも可愛らしい最新の機種だった。

「慎一さんは今日はどうされたんですか？」

アリサちゃんが聞いてくる。

「ああ、そろそろ機種変更したいなと思って、何かないかと見に来たんだよ」

「あ、なら…私と一緒のはどうですか？」

フェイトちゃんに頬を赤らめ、上目遣いで言われる。

…この萌えっ子はなんですか？

そんな風に言われたら思わずはいと言ってしまいそうになる。

俺はロリコンじゃない…じゃないよね？

だめだ…自信が持てなくなってきた。

「むぅ…、慎一さん！　わたしの携帯と一緒にしましょうよ！　機能性もバッチリですから！」

なのはちゃんが掲げたのは自分の携帯。

少し古いが機能とか色々充実してたような…。

「なのはのは少し古いからこっちの方がいいよ！」

「機能性バッチリの方がいいもん！」

そして言い合いを始める二人。

えーと？　どうすればいいんですかね？

「また、始めてる…」

「あの二人って仲良いんだよね…？」

どうやらアリサちゃんとすずかちゃんは見慣れた光景らしい。

アリサちゃんは頭に手をやってため息まで吐く始末。

「…あ、そろそろバイトの時間だ。悪いけど失礼するよ」

「逃げたわ」

「逃げたね」

「ちげぇよ！？」

そう言っても二人の目はジト目から変わらなかった。

もちろんバイト先まで４人はやってきたので問い詰められたのは言うまでもない。

第３１話「誰にも見せない」（前書き）

もうすぐ最終話です。
最終話まで一日一話ペースを頑張りたいです。

第３１話「誰にも見せない」

「強くなってる？」

「そうだよ、あんた一体何をしたんだ！」

本日も翠屋でのバイト。
今日もなのはちゃん達と一弥君は別行動だ。
もしかして一弥君って嫌われてる？

「違うよ！　もうハーレムの為にむやみに仲良くする意味なんてないからだよ！」

あら、そうなの？

というかさ…。

「人の心読まないでくれよ」

「あんたが分かりやすすぎるんだよ」

「ああ、よく言われるなぁ。ま、友達は大事にしなよ？」

「友達としては今までどおりさ、ていうか僕の質問に答えろよ！」

いや、強くなってるって言われても…。

どうやら先日彼女たちと居なかったのは任務に出ていたようで、ヴ

ィータと交戦したらしいがあまりに強く完敗でおまけに蒐集までされてしまったらしい。

「心当たりなんてないけどなぁ」

「嘘だ！　原作じゃあんなパワーアップ設定なかったぞ！」

そう言われてもねぇ…。
もしかしてこないだの説教が関係あるのか？

俺がそう考えていると…。

「八神君、大変だ！　妹さんが倒れたらしい！！」

おもわず持っていたお盆を落とした。

第３１話「誰にも見せない」

バイトを早退させてもらい、急いで病院へ向かった。
けれど着いた頃には…。

「ふー、大丈夫みたいね。良かったわ」

「はい！　ありがとうございます！」

「はぁ…、ほっとしました」

何事もなく、笑顔を浮かべてるはやてが居た。

「せやから、ちょっと目眩がして、胸と手が吊っただけやて言うたやん！　みんなして大事にするんやから…」

「でも…頭打ってましたし」

「何かあっては大変ですから」

「はやて！　良かった」

心配そうな目で見るヴィータをはやてはいつも通り頭を撫でてやる。
はやてが家に居る時倒れたらしい。
こいつらじゃなくても焦るだろうな。

「まぁ、来てもらったついでにちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりして行ってね。」

「はい、先生」

「慎一くん、ちょっといい？」

「あ、はい」

石田先生に呼ばれて部屋を出る。

一体なんだろうか…。

「今回の検査では何の反応も出てないけれど、吊っただけという事は無いと思うの」

「そうなんですか…？」

「ええ、麻痺が広がり始めてるのかもしれないわ…。今までこういう兆候は無かったのよね？」

「と、思いますけど…はやては痛いのとか辛いのを隠す癖があるんで…」

「発作がまた起きないとも限らない…。用心の為にも少し入院して

もらった方がいいかも知れないけれど、大丈夫かしら？」

「はい…分かりました」

「入院！？」

「ああ…そうなんだよ」

検査も終わってそろそろ夕方に差し掛かる頃。
石田先生に伝えられたことをヴォルケンズにも話し、それを多少ぼかしてはやてに伝えることにした。

「あ、でも検査とか念の為とかですから、心配ないですよ、ね？」

「はい」

本当のことを伝えちゃいけない。そのことを４人は理解してくれていた。

「いや、それはええねんけど…あたしが入院しとったら、みんなのご飯は誰が作るんや？」

「うっ…」

ヴィータが悲しみの声を上げる。はやての上手い飯が食えないと思ってのことなんだろう。

「まぁ…、俺がなんとかするさ、はやての足元に及ばないけど」

「大丈夫なんかなぁ…」

「毎日会いに来るよ！　だから、大丈夫」

ヴィータは不安そうなはやてを何とか元気づけようとしたけど、その目は寂しさが溢れていた。

「ふふっ、ヴィータはええ子やな。せやけど毎日やなくてもええよ？　やる事もないし…ヴィータ退屈やん」

確かにヴィータには退屈かもしれない。
まぁ…一緒に居るだけでもいいのかもしれないが。

「ほんなら私は三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ。て、あかん！　すずかちゃんがメールくれたりするかも！？」

「ああ、私が連絡しておきますよ」

「うん、お願いなシャマル」

「では、戻って着替えと本を持って来ます。ご希望がありましたら」

「うーん…何にしよかな～…」

4人には一回家に戻ってもらい、俺は病院に残った。

「う…うぅっ！　くぅ…っ」

「頑張れ…はやて」

はやては苦しんでいた。やはり、昼間倒れたのはただの目眩じゃなかったようだ。

「兄ちゃん…お願い、ギュっとして…昔みたいに」

「ああ…」

はやてを優しく抱きしめる。ついでに頭も撫でる。

「こうしてもらえると少しは楽になるなぁ…」

「嘘つけ、まったく楽じゃないくせに…」

「嘘やないもん…。愛の力…うぅっ！」

4人には絶対に見せない苦痛の表情。
この苦しみを傍で見れるのは俺だけ。

こんなこと嬉しくもない。

はやての苦しむ姿なんて見ていたくないから。

「私…死ぬんかなぁ…？」

「ばーか、はやてが死ぬわけないって」

「そうやな…兄ちゃんと結婚するんやもん…っ」

それについては肯定は絶対しない。

ああ、するもんか。

今日も腐った運命だった。

第３２話「つかぬ間の休息」（前書き）

作品紹介にも書いてある通り主人公は戦いません！
故になのは小説でかなり盛り上がるＡ'ｓの決戦とかありません！

そんなバカな！！

第３２話「つかぬ間の休息」

「すずかちゃん、今日は友達を連れてきてくれるんやって、楽しみやなぁ～」

「そっか、よかったな」

はやてが入院した翌日、シャマルからすずかちゃん達が今日の放課後にお見前位に来ると言っていた。
けれどシャマルは何故か浮かない顔をしていた。
それはなのはちゃんとフェイトちゃんが今、自分たちが戦っている敵だからしい。

そんなわけで、ヴォルンケンズたちと鉢合わせるわけにもいかないのであいつらは今日は彼女達が帰ってから来るそうだ。

ちなみに俺がここに居る理由は、今日は学校が開校記念日だからだ。

あ、どうでもいい？

それと俺は今日バイトだからなのはちゃんたちとエンカウントする心配はない。

あ、これもどうでもいいですか？

第３２話「つかぬ間の休息」

―１２月２３日

俗に言う、クリスマスイヴを翌日に控えた。

はやてが入院してからは毎日が淡々と過ぎていった。

ヴォルケンズはひたすらに蒐集、俺は学校の後、バイトかツヨシん家。

せいぜい揃うのは朝飯くらいだ。

それぐらいに俺たちははやてを軸にして過ごしてきたんだと思った。

そんな俺たちが今日、久しぶりにはやての病室で集まった。

「なんか、みんなが揃うのって久しぶりやなぁ」

はやてがそう言うが、俺たち全員が思ったことだろう。
なんか久しぶりに家族って気がする。

「ザフィーラ、わざわざその姿になってもらって悪いな」

「いえ、とんでもありません」

病院は獣形態じゃ入ることは出来ない。
だからザフィーラには人間形態になってもらった。

「ですがよろしいのですか…？　その…」

「…なんかもう慣れてきた」

「慎一殿…お辛いですが頑張ってください」

「うん…」

俺たちは男として同じ仲間として仲を深め合った。

まぁ…なんの仲間かと言うと…。

「見てみぃ、兄ちゃんとザフィーラ、手を握り合ってるで！」

「おぉ…なんとも言えぬ感じがします」

「ここから、濡れ場に持っていけば…きゃっ」

この腐った三人の妄想被害のことだ。

はやて、俺たちは手を握り合ってるんじゃなくて握手してるんだよ、あ・く・しゅ！

シグナム、あの清く美しかったお前はどこに行ってしまった？

シャマル、濡れ場ってなんだよ、濡れ場って！

久しぶりのこの腐った三人を見たよ。
もう見る機会がなければ良かったけど。

「だるい…兄貴、アイス食いに行こーぜ！」

ヴィータなんかはこれである。
まぁ、腕を引っ張る姿は可愛らしいのだが。

あぁ…どうしてこうなってしまうんだろうか。

せっかく久しぶりに全員が集まったというのに…。

「（けれど…）」

この空気は嫌いじゃない。
いつもの和やかな空気、家族全員が笑顔で居られるこの空間が。

俺は大好きなんだ。

決戦は…明日。

ちなみに明日、俺はバイト入ってます。

あ、どうでもよくない？

第３３話「現在も前世も俺のやることは変わらない」

―クリスマスイヴ

恋人を持つ者たちが１年で最も幸せになれる日。

俺はそう、思っている。

そして恋人を持たない者たちは、それを妬む。

別に俺はそうは思わない。

だって前世の俺はこの日は逃げ回るので必死だったから。

どこに行ってもあの子たちが…っ。

…こほん。

話は大分逸れるが、俺は今、歌ってます。

え？　よく聴こえない？

もう一度言うよ？。

「俺の歌を聴けぇーーっ！！」

俺、歌ってます。

第３３話「現在も前世も俺のやることは変わらない」

こうなった経緯を話そうか。

事の始まりは…学校だった。

「今日で今年の学校も終わりか」

「ようやく冬休みかぁ～、結局バイト見つからなかったなぁ」

「オレなんか明日から始業式まで毎日バイトだぞ？」

終業式も終わり、クラスメイト達が別れのあいさつをして帰る中。

俺たちは教室に残って喋っていた。

「てか今日はバイトとか死ねる…」

「ああ、今日は大変だよな」

「二人とも頑張れ～」

本日はケーキが大変売れます。

そしてケーキとか洋菓子を取り扱ってる店と言えば？

翠屋です。

あぁ…マジで鬱。

「まぁ、それはいいとして…今日も集まんの？」

「当然だよな」

「うん」

俺たちが集まるといえばツヨシの家。

「今年はなにやらかすんだろね？」

「去年は脱衣麻雀で一昨年は上半身裸で鬼ごっこだったな」

というか俺たちはこの年になってなにやってんだろね？

それに前世も同じようなことをやってた気がする。

まぁ、楽しいからいいんだけどさ。

「それがどうしてこうなった」

地獄のようなバイトの後、俺たちは土手に居た。

俺はマイク、凛はベース、良哉はぶら下げられる太鼓、ツヨシはギターを持って。

「いいから暴れんぞこらぁ！！」

「なんでこいつはこんなにキレてんの」

「イェア”アァァーーッ！！」

「うるせぇ！？」

既になんか良く分からない曲を演奏し始めてツヨシは暴れまわってた。

本当にうるさく迷惑極まりない。

「なんでも今日一緒にクエスト行く予定だったネトゲ友達に裏切られたんだって」

「裏切られた？」

「その友達が彼女出来たんだってさ」

「「くだらねー」」

俺と凛は同時に言った。

ああ、実にくだらなかった。

要はリア充が憎いんだろ。

まぁ…でも。

「うるせぇツヨシ！！　声を使うのは俺の役目だ！！」

「イェア”アァァーーッ！！」

マイクを握ってんのは俺なんだ。
俺が歌わずして誰を歌わせる！！

「なんだかんだで慎一は乗り気だね」

「かくいうオレたちもな」

「だね」

俺たちは誰も居ない土手で歌い、演奏し、騒ぎまくった。

「あぁー…疲れた」

一通り騒ぎまくって数時間。

もう声がガラガラだ。

「てか、なんで誰も居ないんだろうな」

凛が言うのはもっともだ。

さっきから人を見かけない。

いくら土手とはいえ、これだけ騒ぎまくってたら警察がすぐにやってくるはずだ。

それなのにその警察が来ない。

せっかくいつでも逃げる準備が出来てたのに…。

「あの光はなんだろうね？」

良哉が指差したのは夜空で舞う光。

色はピンクとか様々なものがある。

方角は…病院だ。

多分あれが決戦とやらなのだろう。

タカシの家で見た記憶通りなら合ってるはずだ。

てか、俺はこんなところで遊んでていいのかね？

一応関係者なんだけどさ…。

「っしゃ！！」

そしてツヨシがいつの間にか大きな何かを設置していた。

「お前それなに？」

「花火」

「は？」

「花火」

真顔でツヨシは答える。

というか…何故に花火？

「っしゃぁ、点火ぁ！！」

「っておい！？」

勝手にツヨシは点火していた。

てかあの大きさの花火なんて言ったらやばいだろ！？

「おい、逃げるぞ！？」

「う、うん！」

「なにやってんだよあいつ！」

俺たちは離れる。

とても危ないと判断して。

けれど、点火した火は素早く…。

「リア充爆破ぁーっ！！」

『ドゴォーンッ！！』

とてつもない音を起てて宙に打ち上げられ…。

「イヤッホォーーッ！！」

綺麗な花火が聖夜の夜空に舞った。

第３４話「そんな壊れた運命はお断りだ」（前書き）

今まではノリで書いてきたので、波に乗ればどんどん書けたのですが、自分が書きたいと明確に思うと難しいものですね…。

第３４話「そんな壊れた運命はお断りだ」

気づいたら、周りに人が居た。
さっきまで人なんか居なかったのに…。

でもって、警察がやってきましたっと。

当然逃げましたー。

俺らはこの年になってなにやってるんだろうねぇ？

そして無事逃げ終わった後はツヨシの家に泊まって、そのまま眠らず朝まで騒いで家に帰って来た。

帰る道中、街は見事なまでに銀世界だった。

「てか、寒いし眠いし…早く帰ろう…」

雪は好きだが、寒いし歩きづらい。
子供のころは無邪気に遊んでられたんだけどな…。

「ただいま…何してんのはやて？」

「兄ちゃん！　リィンフォースが！！」

「りぃんふぉーすって誰？」

病院に居るはずのはやてが何故か自宅に居た。

第３４話「そんな壊れた運命はお断りだ」

はやての話をまとめるとこうだ。

リィンフォースって言う新しい家族が消えようとしている。

うん、意味不明。

「もっと分かりやすく説明してほしいんだが…」

「早くせえへんとリィンフォースが！！」

あー…、こりゃ一大事みたいだな。

ったく、こっちはオールで寝てないて言うのに…。

「ほら、行くぞはやて」
それなのになんで俺ははやての車椅子を押しているのだろうか？
「あー…走りづらっ！！」
「兄ちゃん、頑張って！！」
雪の道を車椅子で跳ばす。あ、もちろん安全運転だから。
ちなみに雪が積もってるとき自転車は危ないからな？
「てか、お前はこの道を一人で行こうとしてたのかよ！？」
「あ…」
「まったく」
はやては恥ずかしそうに俯いた。
そんな当たり前のことが頭に入らないくらい急いでたってことなんだな…。
「そんでそのリィンフォースって子はどんな奴なの？」
「えーと、リィンフォースはなぁ…」

はやてがリィンフォースが苦しんでいたこと、その子を助けてあげたいこと、様々なことを話してくれた。
そもそもはやての脚が動かなかったのは、リィンフォースのバグとやらが原因だそうで…。
その子が今、自分を破壊をしようとしている。

まぁ、詳しいことはよく分からないが、それだけ大事に想っているのだろう。

なら、はやての兄である俺が頑張らないでどうするんだ？

なにより、八神家にまた一人家族が増えるんだからな。

「うおおぉぉーっ！！」

「兄ちゃんファイトぉ！！」

疲れる…。

「お、あれだな！」

「うん！　リィンフォース！！　みんなぁ！！」

広場の中央にみんなが居る。なのはちゃんやフェイトちゃん、一弥君も。

あの見慣れない銀髪の子がリィンフォースか。

「はやて！？　それに兄貴…っ」

「動くな！　儀式が止まる…っ」

俺たちの姿を見て、ヴィータが駆け寄ろうとするが、それをリィンフォースが止める。

「あかん、止めて！！　リィンフォース止めて！！　破壊なんかせんでええ！　私がちゃんと抑える！　こんなん…せんでえぇ！！」

「よくわかんねぇけどさ、破壊なんてしなくてもいいんじゃないか？」

気づいたら俺も言っていた。

いや…昨日はずっと遊んでた身ですけどね？

「主はやて、お兄様、良いのですよ」

え、お兄様！？　お兄様って俺のことなの！？

恥ずかしすぎるんだけど…。

「随分と永い時を生きて来ましたが、最後の最後で…私は貴女に、

綺麗な名前と心を頂きました。騎士達も貴女の側にいます。何も心配ありません」

「心配とかそんな…」

「ですから、私は笑って逝けます」

そう言ったリィンフォースの顔は悲しそうだったけれど…晴れやかだった。

「…話聞かん子は嫌いや！　マスターは私や！　話聞いて！！　私がきっとなんとかする！　暴走なんかさせへんって約束したやんか！」

「その約束は…もう立派に守って頂きました。主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の勤め…。貴女を守る為の、最も優れたやり方を…私に選ばせて下さい」

「せやけど…ずっと悲しい思いしてきて…やっと…救われたんやないか！」

はやては目に涙を浮かべながら言葉を続けた。

「私の意志は、貴女の魔導と騎士達の魂に残ります。私はいつも貴女の側にいます」

「そんなんちゃう！　そんなんちゃうやろ！　リィンフォース！！」

「駄々っ子はご友人に嫌われます。聞き分けを、我が主」

俺は…この流れを黙って見ることしか出来なかった。
それは俺だけじゃなくて…みんなも同じだった。

「…何でや、これからやっと始まるのに…。これからうんと幸せにしてあげなあかんのに…」

涙を浮かべるはやてにリィンフォースをそっと歩み寄り、はやての頬に手を当てた。

「大丈夫です、私はもう…世界で一番…幸福な魔導書ですから。」

「…」

「主はやて、一つお願いがあります。私は消えて…小さく無力な欠片へと変わります。もし良ければ、私の名はその欠片ではなく、貴女がいずれ手にするであろう新たな魔導の器に…送ってあげていただけますか？『祝福の風、リィンフォース』私の魂はきっと…その子に宿ります」

「リィンフォース…」

「はい、我が主」

そして、リィンフォースは俺に向き直る。

「お兄様…どうか、あなたのその優しい心で主、そして守護騎士たちを支えてあげてください」

「いや…そんな」

「私は…ずっと見てきました。本の中で…あなたを」

「あ、ああ…」

リィンフォースは、俺の言葉を聴き終えると、そのまま中心へと戻って行った。

このまま…見送ってしまって良いのだろうか…？

一弥君は、この展開を知っていたのだろう。

涙目になりながらも、静かに見守っていた。

「（今…家族が目の前で自殺しようとしているんだぞ？）」

正確には自殺じゃないのかもしれない、それに俺はあの子のことをよく知らない。

けれど…俺は…。

『いいかい？　それはね…？』

「俺、もしかしたら助けられる！！」

目の前で家族が自殺するのなんて見たくない。

そんな壊れた運命はお断りだ。

第３５話「スペシャルな能力」（前書き）

注意！！

妄想全開＋ご都合主義満載

第35話「スペシャルな能力」

『いいかい？　それはね…願ったことを無かったことにする能力さ』

『願ったことを無かったことに…？』

『テストでミスしたーとか、あの時こうしなければ良かったーとかを解決出来る能力さ』

『それって…どんなことにでも使えんのか？』

『うん、例えば誰か人が死んだとしよう。その人が死んだことを無かったことにする。そしたらその人はあら不思議、いきなりその場に現れるんだ』

『死んだことが無かったことになる…』

『うん、でもその人がその後も事故に合う運命だったら変えられないけどね』

『……滅茶苦茶だな』

『僕もそう思うよ』

第３５話「スペシャルな能力」

「それは…どういう意味でしょうか？」

中心まで戻りかけたリィンフォースはこっちへ振り返った。

「そもそも、お前が死ぬ原因ってなんなんだ？」

「ええ、それは…」

何でも、基礎構造とやらが誰かよく分からん奴に意味不明に弄られ歪められた。

それが原因で呪われた魔道書と呼ばれるようになってしまったのだが…。

そしてそれを修復することは不可能らしい。

このプロフラムが治らない限り、夜天の魔道書とやらははやてを浸食するようだ。

だったら…。

「そのプログラムが元に戻れば良いんだな？」

「そうですが…それは不可能です」

リィンフォースを筆頭にみんなの目も無理だと言っている。

傍から見れば俺は何言ってんの？　空気読めよって感じだよな。

「もしかして兄ちゃん…あれを使うんか？」

「ああ、これなら問題ないだろ？」

以前はやてが言った。

『そんな大事な力をそう簡単に使っちゃダメや！　その力は兄ちゃんが本当に大事な時に使ってな？』

この約束、今がその時じゃないのか？

はやても同意してくれたのか、首をぶんぶんと縦に振った。

「あれとは…？」

「ああ、その歪められた原因を無かったことにするんだ」

「は…？」

リィンフォースだけじゃない、みんなが俺を不思議そうな目で見る。

『こいつ頭大丈夫？』

なんて声も聞こえてこそうだ。

「まぁ…そういう能力があるんだよ」

「ですが、お兄様は…こう言っては失礼ですが、人並み以下…いえ、それよりもっと少ないくらいの魔力なのですが…」

あれ？　俺って一応魔力あったのね。

まぁ…それはいいとしてな？

「とりあえずさ、最後の賭けのつもりでな？」

「はぁ…わかりました」

とても納得してないようだが、気にしないようにしよう。

「（えーと…たしか願うんだっけ？）」

神様は願うことって言ってたし…。

「（リィンフォースの歪められた原因を無かったことにしろ！）」

心から願った。

「何も起きない…」

願ってから1分は経つはずなんだが、何も起きません。

普通こういう時ってなんかこう…光とかが出るもんじゃないの？

「兄ちゃん…失敗？」

はやてが今にも泣きそうな顔をしている。

「いや…その…えぇっと…」

俺の反応にみんながっかりしたような顔をしてくる。

おかしいなぁ…こんなはずじゃ無かったはずなのに。

「なぁ、リィンフォース、何か変わってない？」

俺はもう諦め全開でリィンフォースに聴いた。

「……そんな馬鹿なっ！？」

「わぉ！？」

リィンフォースが突然大声を上げた。

「ど、どうしたんだよ？」

「もしかして…治ったの？」

上からヴィータ、なのはが言う。

「……プログラムが元に戻っている」

『えぇーーっ！？』

みんなが一斉に驚く。

あ、俺も驚いてます。

だって何も起きなかったんだもん。

「な、何故なんだ…っ！？」

「リィンフォースっ！」

「あ、主はやて…」

「（でもまぁ…）」

リィンフォースに嬉しそうに抱きつくはやての姿を見てたらどうでもよくなってきた。

他のみんなは考えがまとまってなかったようだけどさ。

第３５話「スペシャルな能力」（後書き）

終わりになればなるほどつまらなくなってきた気がします…ｗ

第３６話「あるべき日常」

「なんだよあの能力、チート過ぎるぞ！！」

「魔力がＳＳＳランクある君にだけは言われたくないんだけどね」

一弥君がＳＳＳあるのに対して俺なんかＦ－だぞ？

念話をするにも難しいレベルなんだってさ。

念話を受け取れたり受け取れなかったりと不安定なこの魔力。

もはや無い方がいいって…。

なのはやフェイトたちも俺とは天と地の差がある。

はやても高いらしく、この街の人は壊れてるだろ…。

あ、ちなみに俺は今なのはちゃんのことを呼び捨てにしたんだけど、

昨日止めろと言われたからです。

理由を訊いたら『慎一さんは知らないでいいのっ！』と怒られた。

いや、意味がわからないんですけどね？

その様子を見た桃子さんが『女心が分かってないわねぇ』とか言われました。

どーせ俺は分かってませんよ！

分かってたら前世で殺されませんでしたよっと。

「何をいきなり落ち込んでるんだい？」

クロノ君が呆れた様子で言ってきた。
そう言えば話の途中だったな。

第３６話「あるべき日常」

「それで…君のその…レアスキルと認定していいものかどうか分からない能力についてなんだが…」
クロノ君は難しそうに腕を組んで言う。
そりゃそうだよな。
俺の能力ってもう使えないんだし。
神様も言ってたっけ、一度限りだって。
「えーと…ユーノ、任せた」

「なんで僕が!?　まぁいいや…、慎一さんの言うとおり『無かったことにする』ということは本当みたい。闇の書事件が別の似た事件としてすり替わってる」

「あー…やっぱり？」

この『願ったことを無かったことにする能力』は、リィンの歪められたプログラムを無かったことにした。
そして無事リィンは治ったんだが、これによって歴史は変わってしまったかどうかが気になり、俺はクロノ君やユーノ君に調べてもらうように頼んだわけだ。

「しかもこの突然の変化を誰も分かってないみたい。まるで、闇の書事件なんて名前のものはまるで無かったかのように…」

「けれどボクたちは闇の書事件については覚えている。どうやらその現場に立ち会う、もしくは現場を知っている者だけが忘れていないみたいだ」

事態はやっぱり深刻のようだ。
こういうことになるからこそ一回限りだったんだろうか？

「それに…リィンフォースだったか…？　彼女のプログラムが歪められることがなければ闇の書事件も起きないはずなのに、それとよく似た事件は起きている。現に僕の父が蘇ったりはしていない」

どうやらクロノ君は前の事件の被害者みたいだった。
おもわず俺は謝ったけれど、クロノ君は『気にしていないさ』と流した。

「まるで…無かったことになってるんだけじゃなく、リィンフォースの変化に合わせて…神様が勝手に歴史を変えてるみたいだな」

ここまで口を出さなかった一弥君が言った。

正直神様なんて表現はどうかと思ったけど、俺たちは現に神様という存在に会ってるんだよなぁ…。

「正直に言ってどうなってるのかはボクたちにも分かっていない。けれど、これだけは分かってる。今回の守護騎士たちの罪は消えない」

「まぁ…そうだよな」

今までの事件がすり替えられたとしても今回ヴォルケンズが起こした事件は存在しているんだ。

これぱかりは、消えることもないし、消してはいけない。

「けど安心してくれ、ボクたちもなんとか出来るように努力する」

「ああ、ありがとう」

俺はクロノ君に頭を下げた。

俺より年下だけれど、俺なんかとは違い大きなものを背負って生きている。

なんとなくこの子が…眩しく見えた。

三人との話し合いも終え、俺は家に戻った。

今日は空き部屋をリィンの部屋にするため、その大掃除だ。

「おお、もう終わってんの？」

「あ、兄ちゃんお帰り！」

リィンの部屋とする予定だった部屋へ向かったら、既に終わっていたようだ。

「なんだ、俺いらなかったな」

「そんなことあらへんって、疲れた私を癒すために兄ちゃんの部屋で…」

「お前がそういう知識をどこから仕入れてるのか不安になってきた」

相変わらずのはやてを無視して部屋へと入った。

「へぇ、なかなか良い感じじゃないか」

「あ、お兄様…」

部屋の中にはリィンが居た。
少し照れくさそうに。

「ほ、本当に私なんかのために部屋を用意してもらってよろしかったのでしょうか…？」

「いいんだよ、家族なんだから気にすんなって」

まるでシグナムみたいな反応をしてくれる。
まぁ、あいつは今でもあまり部屋で寝てくれないけど。
そしてシグナムの寝顔を¥に見とれる度にはやてに刃物を向けられる。
だってしょうがないじゃないか…俺、男なんだし。

「よっしゃ、そろそろ飯にしようぜ。今日は贅沢に行こうか」

「その後は兄ちゃんとしっぽりむふふと行きたいものやなぁ」

「もうそういうのはいいから」

ああ、いつもと変わらない。

これが日常。

あるべき日常。

取り戻した日常なんだ。

最終話「腐った世界を生きる」（前書き）

A-s編、完結です。

最終話「腐った世界を生きる」

「起きてください、お兄様」

「ん…？」

朝を告げる明かりが俺を照らす…。
そしていつもの俺を起こす優しい声…。

「ああ…おはよう、アイン」

「はい、おはようございます」

ああ、今日もいつもの朝だ…。

最終話「腐った世界を生きる」

あれから6年が経った。

とりあえず俺は社会人になりました。

就職先は『ツヨシコーポレーション』

我が仕事場ながら酷い名前だ。

社長がツヨシで、同僚には凛と良哉も居る。

それに結構でかい企業である。

最近はアリサの所の会社と何か友好関係を結んだようだ。

そして今日も仕事で、いつものようにアインに起こされた。

アインとは？

ああ、リィンフォース・アインのことだ。

何故名前を分けているのかと言うと…。

「兄様～、おはようです」

「おはよう、ツヴァイ」

ふわふわ浮きあがってるこの小さな子。

リィンフォース・ツヴァイが居るからだ。

2年前、はやてはこの子を完成させることが出来た。
何故、作ることになったのかは理由があるわけだが。

「兄ちゃんおはよう」

「ああ、おはようはやて」

そして今日もリビングでは、はやてが迎えてくれる。
キッチンに立ってな。

「じゃあシャマル、グレアムさんに小包送っといてくれよ?」

玄関で靴を履きながらシャマルに伝える。

「はい！　お任せです！」

「シグナムは後で合流やね?」

隣には運動靴の紐を結んだはやてがいる。

「はい、後ほど。」

「よっこいしょっと！」

そしてはやてはそのまま自分の足で立ち上った。

「忘れ物ないか？」

「うん！」

「アイン、今日って何時から会議だっけ？」

「今日は13時からですね」

「了解」

「そんじゃ…いってきます！」

道中、ザフィーラを散歩中のヴィータと会った。

「あ、三人とも行ってらっしゃい！」

「うん！行ってきます！」

「ああ、行ってくる」

「いってきますっと」

「あ、はやてちゃ～ん」

家を出てから１０分くらいだろうか、いつもの場所にはみんなが居た。

「おはようはやてちゃん、慎一さん、アインさん」

なのは。

「おはよう、三人とも」

フェイト。

「今日は早いんだね」

すずか。

「おはよう！　はやて、今日集まるんだって？」

アリサ。

「相変わらず両手に花で羨ましいんだよリア充！」

一弥。

いつものみんなが居た。

「そんじゃ、俺とアインはこっちだから」

「みなさん、お気をつけて」

俺たちは、はやてたちと別れた。

アインが何故、俺と共に仕事場へ向かっているか？

それは、俺がアインを治したあの時に原因がある。

アインの歪められた原因はなかったことになって治ったはずなんだが…。

どうもそれが無かった場合、アインは魔道書として力を失ってしまったらしい。

詳しい経緯は分からないし、その結果アインがここに居るのもおかしいと思われる。

けれどアインはここに存在していて、俺たちと共に暮らしてる。

それだけで充分だ。

そして、アインが自分でとった行動は…俺と働くことだったわけだ。

「アイン、今、幸せか？」

「はい！」

あの事件から6年経って、いろんなことがあったけれど、俺たちは今を生きている。
それがなによりだ。

昔を思い返せばいろいろあるけれど、それでも今が幸せならそれでいい。

俺たちは…今日も腐った世界を生きている。

最終話「腐った世界を生きる」（後書き）

ひとまず、ここで一旦区切ります。
最終話は原作と同じ６年後ですが、この後にもちゃんと空白期は書く予定です。

ただ、作者はサウンドステージ、ゲーム、漫画版、ｓｔｓの知識は無いのでどうなっていくか分りませんがこれからもよろしくお願いします！

A' s後においてのキャラ設定（前書き）

遅くなってしまい申し訳ありません！

何故か第1話より、キャラ紹介が時間かかってしまった…。

基本的には変わりませんので飛ばしていただいても大丈夫だと思います！↑

A' s後においてのキャラ設定

『八神家』

杉矢慎一→八神慎一

本作の主人公。
前世では田村綾香に恋心を抱いていたが、いろいろあり殺害され転生する。
アニメの知識は無いに等しい（第9話参照）
新しく生を受けたこの世界で平穏に生きようとするが実る可能性は日を追うごとに低くなっている。
バンド活動を前世からやっており、こっちの世界でも続けている。
アーティストとしての腕前はプロ手前。
魔力は無いに等しく、一般人と考えてよい。

八神はやて

兄である慎一に恋心を抱いている。実の兄とか血のつながりとかは気にしていない様子。
原作開始手前からヤンデレへの頭角を現し、日々上達している。
しかし、兄である慎一の努力もあってかまだ前世の幼馴染三人組のレベルまでは達していない。
料理が得意であり、八神家の料理担当として外すことが出来ない存在。
最近は兄が受けであるＢＬを妄想することもしばしば。

シグナム

ヴォルケンリッターの将。
当初は凛凛しく美しかった。しかし、シャマルの手により腐への道を歩み出してしまった。
腐の部分を除けば今まで通りしっかりしている。
ただし時々うっかりしていることがある。
後、やっぱりバトルマニア。

ヴィータ

はやてと同じく慎一に好意を抱く。
かつては慎一の心のオアシスであったがヤンデレへの道を歩み始めたことにより無くなった。しかし、まだヤンデレ経験値は低い。
なのはと初の戦闘時に、なのはから慎一の匂いを感じ取ったため、攻撃に殺意がこめられてたとか。
ゲートボールが趣味である情報あり。

シャマル

八神家のお姉さんとも言える存在。
腐のレベルがはやてより高く、慎一は頭を痛めているとか。
最近は慎一の相手でザフィーラ以外に一弥、クロノ、ユーノでも妄想している。
八神家に来て、1度だけキッチンに立ったが、それ以降その姿は目撃されていない。

ザフィーラ

八神家で一番頼りになる存在。
ヴォルケンズで唯一常識を忘れていない。
アルフからのアドバイスで小型に移行することも考えたが、人間化

すると子供になるので、シャマルの妄想がより酷くなる恐れがあるため検討中。

リィンフォース・アイン

慎一の能力により、生存することとなった。
魔道書としての力は失われており、現在は身体能力が高い人間みたいなもの。
慎一に助けられた故か彼に対し特別な想いを抱くがそれが恋なのかは現時点では自覚していない。
少しでも役に立ちたいと思い、慎一にギターを習い始める。
後に慎一と共に『ツヨシコーポレーション』に就職。

リィンフォース・ツヴァイ

八神家の新たな家族。
誕生理由は原作とほぼ同じ。
八神家では貴重ともいえる純粋な心の持ち主。
今後の展開次第では改変あり。

『地球組＋アースラ』

高町なのは

幼少期での慎一との出会い、出来事があり慎一に恋心を抱くようになる（第3話参照）
初めは慎一には女性の影が全く無かったため、可愛らしく甘えていた。
しかし、フェイト、はやての登場により焦りが生まれている。
綾香はこれによってヤンデレになったが果たしてどうなることやら。

フェイト・Ｔ・ハラオウン

第２３話の出会いが衝撃的過ぎて慎一の事を意識してしまう。
それは後に恋へと変わっていく。
過去の母からの虐待等の経験から人に暴力を振ることが嫌い。
ヤンデレになることはない…はず。
なのは、はやてに比べると付き合いが一番短いため、焦っているとかなんとか。

ユーノ・スクライア

未だ出番が少ない。
空白期はほとんど地球に居ないためかさらに出番が減る。
なのはに想いを寄せていたが、諦めてなのはを応援する。

クロノ・ハラオウン

ユーノと同じく出番が少ない。
果たしてどちらが影が薄いＮｏ１に輝くのか…？

リンディ・ハラオウン

クロノよりも出番が多いという現実。
子持ちに見えない容姿をしている。

エイミィ・リミエッタ

未だ出番なし。

果たして登場するのか…？

アリサ・バニングス

なのはとフェイトの恋路を優しく見守る親友1。
ヒロイン昇格は絶対ない。
時に慎一からの相談も受ける。
親の会社がツヨシコーポレーションと友好を結んだことに頭を痛めているとか。

月村すずか

なのはとフェイトの恋路を優しく見守る親友2。
ヒロイン昇格は同じくない。
はやてと仲良しということもあって八神家に来ることが多い。

高町家

士郎や桃子、美由希はなのはの恋を微笑ましく見守る。
ただし恭也は少し不機嫌である（自分よりなのはに懐かれてるため）。
しかし、妹を大事に想う部分では仲が良い様子。

『オリキャラ』

相馬一弥

言わずとしてたテンプレオリ主。
しかし主人公は慎一である。
最近はハーレムを諦めたらしく、ただの友達として接している。

ただし、はやてだけは諦め切れてない様子（しかし相手にされず）戦闘面で活躍することが多いが、本小説は戦闘が無いため影が薄い。

朝霧　凛

バンドメンバー。
慎一と同じく『翠屋』でバイトをしている。
バイトが好きで他にもいろいろ掛け持ちしているらしい。

相沢　良哉

同じくバンドメンバー。
意外と頭が良い。
いつも集まるメンバーは問題児ばかりなので、まとめ役とも言っていい。

ツヨシ

相変わらずエロゲ制作を続け、何故か『ツヨシコーポレーション』を立ち上げる（最終話参照）。
発狂とエロゲ制作以外は謎に包まれており、ある意味凄い奴。

第1話「結局は腐った世界」

この6年間ではいろんなことがあった。
それは凄く思い出深いことやどうでもいいことだったり。
俺の人生が危うくなったり前世と同じ道になっていたり…。

と、とにかく、俗に言う後日談って奴を語っていこう。

全てに決着がついた翌日の日からだ…。

第1話「結局は腐った世界」

どうやらはやては外出の許可をもらったわけではなく、無断で病院を抜け出していたそうだ。
当然そのことは石田先生に怒られるわけだ。

…何故か俺も怒られたけど。

そして、なのはちゃんたちは俺やアリサちゃんとすずかちゃん、高町家の人たちに全てを語ってくれた。
さらに何故かなのはちゃん…なのはたちを呼び捨てにすることになった。

…どうしてこうなった。

そして帰ればいつもの自重しないはやてがそこに居ましたとさ。
もう少し自重してほしいんだが…。

ああ、いつもの腐った世界ですねぇ！
皮肉をたっぷりと込めて空へ叫んだ。

「うーん…」

ベットで寝ていた俺は何故か寝苦しかった。
なんでだろう…。はやてとヴィータは病院に泊まってるからベッドに潜り込むことは無いはずなんだが…。
ちなみにヴィータも病院へ泊まってる理由は『今日は、はやてと居たいっ！』と言ったからである。
だから石田先生も特例でヴィータも泊まることを許可したわけだ。
これでヤンデレ属性が無ければただの可愛い女の子として見れるんだけどなぁ…。

そして当然のようにはやてが病院に泊まる理由はまだ入院中だから

だ。

そんなわけで今この家には俺のベットに潜り込む奴は居ない。

…考え過ぎて眠気が覚めた。起きてこの目で確かめるか…。

「すぅ…すぅ…」

「予想外過ぎて何も言えん」

寝苦しかった理由…それは。

「う～ん…主…お兄様…」

「なんでお前が居るんだよ…リィンフォース」

俺に抱きついたまま眠ったリィンフォースが居ましたとさ。

「お前にはちゃんと部屋を用意したはずなんだけど…」

「申し訳ありません…」

あの後、リィンフォースも目が覚めたようで、こうして話すことになった。

「で、なんかあった？」

「いえ…その…」

「まぁ…この状況は男の俺としてはかなり良いんだけどさ…。やっぱり…ねぇ？」

リィンフォースは美人だしスタイルも良いから…さ。
そんな子が抱きついて寝てたらどうなるか男なら分かるだろう！？

「不安なんです…」

「へ？」

「今まで全てを破壊してきて…多くの命を奪ってきた私がこのまま存在していて良いのかが…」

自分を抱きしめて顔を俯かせながらゆっくりと言葉を出していく。

「お兄様の力で誰も私の罪を覚えていない…。私の罪は一生償うことが出来ないのでしょうか…？　それでは私は…生きていく自信がありません」

俺のあの力で魔道書としての力を失って人間となったリィンフォース。
バグだらけだろうとあの力はこの子の全て、突然変わってしまった自分と今までの過去がリィンフォースを苦しめている。

リィンフォースの目には…涙が浮かんでいた。

「…罪を償うことは無理なんだろうな、誰も覚えてないんだし」

「…っ」

「けどさ、俺たちは覚えている。もちろんリィンフォースも」

「…え？」

リィンフォースは少し驚いた表情になった。
俺が何を言いたいのか分かりかねてるんだろう。

「お前がその罪を忘れずに生きればいい、そして幸せになればいいんだ」

「それだと私は…っ」

「『強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール』だったっけ？
罪を償うんじゃなくてその罪の分を幸せに変える…その名前のとおりにやってみな」

それが『リィンフォース』という名前なんだからな。

「私に…出来るでしょうか」

「出来るさ、ダメなら俺が手伝ってやる！」

家族を助けるのも家族の役目ってな？

「分かりました…主より受け賜ったからこの名前…。恥じぬよう精一杯生きます」

リィンフォースの目には…もう迷いが無かった。

まぁ…これだと何というか…世話の掛かる妹が増えたって感じだな。

とにかく、今日この瞬間からリィンフォースの日々がようやく始まった。

「あの…今日はその…一緒に…」

「あー…一緒に寝ればいいの？」

「はい…」

「…おいで」

「はいっ！」

寝ながら抱きつかれた俺は寝ることなんて出来るわけ無かった。

第2話「べ、別に羨ましい展開なんかじゃないんだから！　↑ツンデレにあらず

更新ペースが凄く落ちてますね。
最低でも週1は目標にしたい…。

「え、なに？　今日もですか…？」

「あ、いえ…お兄様が嫌でしたらいいのですが…」

美人にそんな顔で落ち込まれて断れる奴なんて居るのだろうか？

ああ、もちろん俺は無理です。

「…どうぞ」

「あ、ありがとうございますっ」

大晦日をもうすぐに控えた冬の日。

はやては今日には退院してくる。

だからさ…。

「今夜で最後だからな？」

「あ、はい…了解しました…」

そんな寂しそうな顔をしないでくれ…。

ていうかお前ってそんなキャラなんですか…？

こないだの出来事から、リィンフォースは俺と一緒に寝ている。

何度断ろうともしたが、主人に見捨てられた子犬のような顔をリィンフォースみたいな美人にされてみろ！？

断れるわけがない。

「そう思うだろ！？」

「死んでくれリア充」

「むしろ僕達が殺してやる」

俺に味方なんて居なかった。

第2話「べ、別に羨ましい展開なんかじゃないんだから！　↑ツンデレにあらず」

「ただいまー」

昼過ぎになってはやては帰って来た。
正式に退院許可が出たらしい。

来年からは脚の具合を見てリハビリを始めるとか何とか。

「やっぱり我が家の空気が一番やなぁ」

「病院は独特のにおいがあるしな」

俺は薬の匂いがあまり好きじゃないから病院で寝るなんて死んでもごめんだ。

「ところで兄ちゃん、なんで毎晩リィンと寝とるん？」

時が止まったような気がした。

え…ばれてるの？

「シャマルに訊いたで」

「シャマルゥーーッ！！」

なんであいつが知ってんだよ！？

「毎晩リィンフォースがお兄さんのお部屋に行ってるのを見れば誰でもわかりますよ」

俺が大声でシャマルの名を叫んだら丁度良いタイミングでシャマルが帰って来た。

ていうか普通に見られてたんですねー。

「それで、どういうことなん？」

はやての顔はとても良い笑顔だが、目が！　目が笑ってないっ！！この表情は素晴らしいくらいにマキに似てきまして、この子が１６歳になたら本当に恐ろしいです。

「いや…その…ですね？　あの子が寂しいそうでして…」

そして俺は怯えながらはやての質問に答えるのだった。

冗談じゃなくやばいんだって！

あの殺された日と同じような汗が背を伝う。

はやては車椅子で少しずつ迫って来て、シャマルは目を輝かしながらこの状況を見てる。

あのね？　君らのお兄さんが殺されそうなんですよ。君たちの主を止めてくれよ。

この気持ちはシャマルに伝わることは無かった。

なぜなら、はやてが突如笑いだしたからだ。

「ぷっ、あはははは！　兄ちゃん目がマジや」

「……へ？」

「私が兄ちゃんを殺すなんて思ってるんか？」

はい。と頷けないのが俺のヘタレさなんですね。

いや、まぁはやてが俺を殺すなんて思いたくないけど目がマジでしたよ。

はやてさん、あなたの目がね！

「まぁ…知らない女とそないなことしてたらわからんけどな？」

「え？　なんか言ったか？」

「ううん、何にも言ってないでぇ！」

絶対何か言ってただろうけど訊かないことにしよう。

その方が良いに決まってる。うん、そうだ。

今日も実に腐っていた。

ちなみに何故か今夜から、はやて、ヴィータ、リィンフォースがローテで俺と寝ることになった。
俺に了承の一つもなかったのは当たり前とここに記しておこう。

第3話「年越し」（前書き）

大分期間が空いてしまいました；

お待たせして申し訳ありません＞（＿＿）＜

第3話「年越し」

今年1年は色々なことがあったな。

例を上げるとキリがないので出したりはしないが今年の1年は密度の濃い年だったんじゃないだろうか？

喜怒哀楽を全て味わった1年だった。

けれどこの1年は嫌いじゃない、むしろ合って良かった。そう思える。

だからこそ――来年も良い年になればいい。

第3話「年越し」

「ふぅ～…、終わったぁ！」

最後の食器を洗い終え、今日の業務が終了した。

明日の大晦日と三箇日は翠屋はお休みなので実質今年最後の業務となった。

「お疲れ様、慎一君」

「慎一くん、ご苦労様」

俺を労ってくれる高町夫妻。
普段ならお疲れ様ですと言って終わるのだが…。

「何故俺がこの時間まで残されたんですかねぇ？」

今日は閉店前にはあがれるシフトだったはず。
しかし気づけばこの時間…。

…どうしてこうなった！

「さて、桃子、なのはも家で待ってるから早く帰ろうか」

「子供待たせるのはだめよね」

「あのー…無視しないでください…」

どうもここ最近俺の扱いがパターン化されてきた気がする。

…バイトの時給が高くなかったら辞めてやる！

そう俺が決意していると頬に冷たい物が押し付けられた。

「はい、お疲れ様」

「あ、どうもです美由希さん…」

俺の横にはさっきまで一緒に食器を洗っていた美由希さんが来た。
渡された飲み物はポカリ。

…当然冷たい。

「この寒い日に冷たい物を渡してくるのは嫌がらせですか？」

「え、温かいポカリなんてうちにあったかなぁ…？」

「いや、そういうわけでは無いんですけど…」

ボケで返されると何も言い返せなくなってしまう。
まぁ、この人確信犯らしいが。

「でも疲れた身体に甘い物って良いんだよ？」

「まぁ…そうなんですけど」

そう言って美由希さんが飲んでるのはココアである。
もちろん『あったか～い』ココアだ。

俺にもそれを渡してくれればいいのに…。

美由希さんのさりげないいじめに少し泣きそうになった。

「慎一くんー？　早くしないと鍵閉めちゃうよ？」

「それともここに止まって行く？」
追撃で高町夫妻の攻撃が待っていた。
…俺もうこの職場嫌だ。

「あー…あと少しで今年も終わりかぁ」
「今年は長い１年やったなぁ」
１２月３１日。
あと３０分もしないうちに今年は終わる。
「兄ちゃん今年は出かけへんの？」
「んー…去年までは、はやてが寝てたからいいけど今年は起きてるんだろ？　だったら俺も残ってるさ」
「ふふ、ありがとう」
俺は毎年大晦日はツヨシの家に行っていた。
まぁ、理由は大騒ぎする予定だからだ。

けれど今年は家族も増えたし色々あったということで起きるということらしい。

ならば俺も家に残ろうという決断をした。

…何故かツヨシにキレられたがあいつは放っておこう。

「しかし…何故0時過ぎまで起きているのですか？」

「んー…やっぱり年を越す瞬間をみんなで迎えたいからかな」

「ベルカにはそういう習慣はなかったん？」

「そういうのは…ありませんでしたねぇ」

まぁ、大晦日のこの習慣もいつからあったのかは分からないし、別にやらなくてもいいんだけど。

でもなんとなく起きていたくなるんだよな。

「それにな、0時になる瞬間にジャンプしたら新年迎えた時、地球上に居なかったって自慢出来るぞ？」

「それ、面白そう！　あたしやる！」

「みっともないから止めろ…」

はしゃぐヴィータをリィンフォースが呆れて止める。

言っといて何だが、これがくだらないと思ったのも結構前だしな。

…ツヨシは未だにやってるが。

「主、眠いですか？」

「ううん…大丈夫やで、ザフィーラ」

ザフィーラに寄りかかりながら座ってるはやてはもう眠そうだ。

「主はやて、あまり無理しない方が…」

「大丈夫やってシグナム。それにみんなで新しい年を私も迎えたいしなぁ」

そう、去年までとは違う、今年はみんなが居るからな。
これから先も…ずっと。

「あ、1分切りましたよ」

「そういえば新年の挨拶って何言えばいいんだっけ？」

「ヴィータはもう少しちゃんと聞いてろ」

「新年明けましておめでとうございますだ」

「あ、私は兄ちゃんに寄りかかるからザフィーラもこっち来て参加しよ？」

「お気遣い感謝します主」

「はやて、お前は寄りかかりたいだけだろ」

着々と時間が進んでいく。

「そうだ、みんなでカウントダウンしよ？」

「お、いいねそれ。７人いるから７開始で俺から時計回りでやるか」

みんなが頷き賛成のサイン。

よし…それじゃあ。

「７！」

俺。

「６！」

ヴィータ。

「５」

リィンフォース。

「４」

シグナム。

「３！」

シャマル。

「2」

ザフィーラ。

「1！」

はやて。

『あけまして、おめでとうございます！！』

今年も…良い1年になりますように。

第3話「年越し」（後書き）

ベルカで年越しの習慣が無いとかは勝手な妄想でございますw

第４話「今さらながら俺の精神年齢は３０前後なんだよね」（前書き）

１か月に１話更新て相当遅いですね…。
なんとか１週間に１話レベルに戻したいです。

第４話「今さらながら俺の精神年齢は３０前後なんだよね」

『ねえ、しんいちくん！　『けっこん』ってしってる？』

『ん～、なにそれ？』

『えっとね、すきなひととずっといっしょにいられることだよ』

『それってぼくとあやかちゃんみたいに？』

『うん！　だからしんいちくん。わたしとけっこんしようね！』

第４話「今さらながら俺の精神年齢は３０前後なんだよね」

「んぁ…？」

眩しい日の光で目が覚める。

どうやらもう朝のようだ。

身体を起こそうとするが何故か動き辛い。
おまけに両腕が痛い。
顔を右に向けるとはやてが、左にはヴィータが俺の腕を枕代わりに眠っている。

…えらい体制で俺は寝てたんだな。
床ではシグナムたちが寝息を立てている。
結局あの後は1時間くらい話をしてはやてとヴィータが眠っちまったからそのまま寝たんだっけな。

「それにしても懐かしい夢だったな」

あれは前世での俺が小さな頃の話。
俺と綾香は結婚の約束をしたんだっけ…？
結局俺はあの時からずっと綾香の事が好きだったんだな。

「ていうか…とんだ初夢だな」

何故よりにもよってこの夢なのだろうか、もう叶うことがないのに…。
それに俺は今でも綾香に未練タラタラなのだろうか？

「ま、初恋は報われないものだしな」

もし俺がもっと自分の想いを貫き通せたのなら…。
綾香と恋人関係になれていたのならば…。
結婚を夢見て楽しく過ごせていたのだろうか…。

そんなＩＦをいつまでも考えてしまう。

「新年早々、なんで暗くなってんだか」

とりあえず両腕の痛みの原因のチビッ娘二人と床で寝てしまっている家族を起こすとしよう。

「改めましてあけましておめでとう。そしていただきます」

みんなと改めて挨拶をし、朝食をとる。

もちろん食卓には餅が並んでいる。

「これ食いずれぇけどうめぇな！」

「そんなに急いで食べたらアカンてヴィータ！」

「大丈夫、だいじょ…うっ！？」

「あー！　言わんこっちゃない！！」

ヴィータが初めて見る食べ物に一番テンションが上がっている。

はやてはヴィータが餅を喉に詰まらせないか不安のようで少しハラハラしている。

そして見事にヴィータは餅を喉に詰まらせた。

「お兄さん、見てください！　私、料理が出来ていますよ！」
「餅を焼くくらいで大げさな…ってシャマル！　焦げてるって！？」
「きゃぁ！？　え、えーと、お水！！」
「ちょ！？　コンロに水ぶっかける奴が居るか！？」
「キャーッ！？　ごめんなさい！！」
シャマルは味付けが問題だからこれくらいは大丈夫だろうと油断していた。
目を離した隙に焦がし始めていた。
そして気づいた時にはコンロに水をぶっかけた。
…さすが過ぎてなにも言えん。
「む…箸が上手く使えん」
「ふっ…見ていろザフィーラ、箸捌きはこうやるのだ！」
「見事だなシグナム…今度、オレにも教えてはくれないか？」
「いいだろう…お前に私がこの世界で培ってきた文化を教えてやろう」
「いや…そこまでは聞いていないのだが…」
ザフィーラには餅を食うために人間形態になってもらったのだが、

やはり箸で苦戦していた。
シグナムがなんか暴走しているが…まぁ良しとしよう。

「お兄様、あまり食べていないのでは？」

「ああ…餅を焼きながら少しずつ食べようとしたんだが…ヴィータが物凄い勢いで食べつくしているせいで残って無い」

一度、詰まらせたもの、その後は落ち着きながら凄い量を食べている。おかげで餅がもう無い。

「ふふっ、そうだと思ってお兄様の分を少しとって置きました。どうぞ」

リィンフォースは自分の椀に入ったお汁粉を俺に渡した。

「おおーっ！　ありがとなリィンフォース」

「いえ、礼には及びませ…っぁ」

「どうした？」

「い、いえ…っ（今お兄様が口付けた所…私が口付けた所と一緒…）」

「そうか、あ、全部もらっちゃ悪いから後はリィンフォースが食べてくれ」

「あ、はい（ここに…お兄様の唇が…）」

リィンフォースがお椀を見て少し唸っている。
俺、もしかして食べ過ぎたか？

結局リィンフォースは朝食が終わるまでお椀と睨めっこをしていた。

第４話「今さらながら俺の精神年齢は３０前後なんだよね」（後書き）

多分これが今年最後の更新になります。
もしかしたらまた更新できるかもしれませんが…。

それではみなさんよいお年を！

第5話「新年明けましておめでとう…今さら？」（前書き）

新年1発目！

第5話「新年明けましておめでとう…今さら？」

「うわー、めっちゃ混んでんのな」

元旦ということなので神社へとやって来た。

だが、今いるのは俺一人だ。

はやては車椅子なのでこの混みようだと迷惑掛かるとはやて自身が言っていたため、後日全員で行こうという話になった。

ちなみに俺が今一人で居る理由はツヨシ達と待ち合わせのためである。

「あ、慎一さん！」

「ん？」

人ごみの少し先にはなのはちゃんたちが居た。

第5話「新年明けましておめでとう…今さら？」

『あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします』

定番の挨拶をする。

今ここには高町家の面々＋フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんである。

「ところで慎一さんはどうしてここに？」

「ああ、友人たちと待ち合わせにね…」

少し早く来すぎたためかまだあいつらは来ていない。

「ところでなのはちゃ「なのは！」あ、はい…なのはたちはもうお参りしたのかな？」

いかんいかん、そういえばちゃん付け禁止されてたんだっけな。

「はい、丁度今さっきに」

「慎一さん、はやてたちは…？」

俺一人で珍しいと思ったのかフェイトちゃ…フェイトが訊いてきた。

「ああ…はやては車椅子の問題とかがあってね、後日行こうって話になったんだよ」

それにツヨシ達も来るし、ていうかツヨシをはやてに会わせたくない。あんなダメ人間をうちの妹に会わせてはならない。

「ところで～…あたしたちに言うことあるんじゃないの？」

「ああ、あけましておめでとう」

「違うわよ！　ていうかさっき言ったじゃない！！」

「くすくす…」

アリサの問いの意味が俺は分かっていたが冗談で平然と返した。
どうやらアリサに冗談は通じずすずかにまで笑われた。

「まあ…冗談だって、着物だろう？」

今日は初詣ということで四人とも着物を着ている。
四人とも素材がいいだけに凄く似合っている。

「四人とも似合ってるよ、凄く可愛い」

それはもうお世辞抜きで。

「えへへ…」

「あぅあぅ…」

なのはとフェイトは少し恥ずかしがっているのか嬉しいのかちょっと照れていた。

「なにそれ、もうちょっと気の利いたセリフ言えないの？」

「もう、アリサちゃんたら…」

「アリサは黙ってれば良いんだけどな」

「どういう意味よ！」

そのままの意味である。

この口の悪ささえなければ１００点満点なんだがな。

「相変わらずだねぇ、慎一君」

「ほんとねぇ」

そして高町夫妻がこのやり取りを笑っていた。

「改めましておめでとうございます。今年はシフト減らしてくださいね」

「あっはっはっは」

「うふふふ」

「スルーですか…」

どうやら今年も俺のシフトはガチガチらしい。

俺バイト先ミスったかなぁ？

「まぁまぁ、今年もよろしくね」

「今年も頑張れよ」

恭也さん、美由希さんとも挨拶を交わす。

しかしまぁ…恭也さんの袴がめちゃくちゃ似合ってる。

イケメン滅びてくれ。

「あれ、そういえば一弥は？」

この組み合わせに一人足りない。

タカシもとい一弥は居ないのだろうか？

「ああ…一弥くんなら…」

「さっきクラスの子たちに連れ去られたよ」

どうやらもう一人のイケメンは女子に大変モテているらしく、クラスメイトに拉致られた模様。

さすがタカシのオリ主だな。

ほんとイケメン滅びろ。

「まぁ、とりあえず今年もよろしくお願いします」

今年も皆に色々とお世話になるだろう。

そんな意味も込めて俺はもう一度挨拶しこの場を後にした。

その後ツヨシたちと合流しツヨシ家へ。

「なぁ、お前と一緒に居た子誰？　あの元気ある子」

珍しくツヨシが部屋に籠らず談話に参加してきた。

「ああ、アリサだよ。アリサ・バニングス」

「バニングスってあの？」

「凄いね、お嬢様だ」

バニングス社。

この名前は日本の…いや世界で有名だろう。

社長であるデビット・バニングスの娘がアリサである。

「会社作るわ」

「「はぁ？」」

「あの子見てたらそう思った。俺社長になるわ」

「あ、あぁ…」

「なんていうか…」

「夢は大きく?」

「おう」

そう言ってツヨシはまた部屋に籠った。

…俺たちはなんていうか開いた口が塞がらないって感じだった。

そしてこれが数年後実現するのはまた別のお話。

第5話「新年明けましておめでとう…今さら？」（後書き）

新年明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします！

第6話「家族で初詣」（前書き）

ちょっくら新作を書こうか悩んでます。
まあ内容は過去編なんですけどもｗ

詳しくは活動報告へ載せてるんで見ていってください。

第6話「家族で初詣」

新年明けてから数日が経ったある日のこと。

「そういえば渡すの忘れてたな、はいお年玉」

「毎年ありがとうな、兄ちゃん」

毎年俺が続けてること、はやてにお年玉をあげることだ。
しかも今年はバイトのおかげでお金に余裕があるので去年より多めに入れている。

「…お年玉ってなんだ？」

言葉の意味が分からなかったのか、ヴィータが聞いてきた。

「ああ、詳しい意味とか知らないけどようは新年明けたら親とかからお金がもらえるちょっとしたイベントだな」

「あ、兄ちゃん、ヴィータにもあげたらどうや？」

「あたしももらえるのか？」

「そうだな…ヴィータなら大丈夫だな。ちょっと待ってろ」

お年玉を入れる袋はまだ余ってたはず…お、これだ。

袋にお金を畳んで入れて…これでよし。

「ほい、ヴィータ」

「あ、ありがとう兄貴」

ヴィータは少し嬉しそうにお年玉袋を眺めていた。

俺とはやてはヴィータから少し離れ…。

「…ヴィータならいい意味ってさ…やっぱり子供にしか見えないから？」

「うん、ヴィータには内緒やで」

言ったら俺が怒られる…。

後日、このことをヴィータがなのはに話して、もらえた理由を聞いてヴィータが少し拗ねたのは別の話。

第６話「家族で初詣」

「さすがに人は少ないな、これなら大丈夫だな」

年が明けてから1週間くらいだろうか、俺たちは神社へと来ていた。
目的はもちろん、三箇日には断念した初詣だ。

「わざわざごめんなぁ、私のために…」

「いや、こういうのは全員一緒じゃないとな」

はやては自分が車椅子だから人込みでは迷惑掛かると言って、俺だけに先に初詣に行ってくれと頼んだが、やっぱりこういうのは家族で一緒にしたい。

だからツヨシたちと来た時も俺だけはお参りしなかった。

「ところでお参りというからには…何か作法でもあるのですか?」

ベルカにはお参りという習慣は無かったのだろうか。
なんかひたすら戦っているイメージだしなぁ…。

「まぁ、いろいろあるけど、賽銭箱にお金を入れて、鈴を鳴らして、手を揃えて今年は良いことありますようにとかを願うでいいと思うぞ」

「はぁ…なるほど」

まだよくわかってない感じのシグナムだった。
まぁ、これなら先にやってやった方がいいかもな。

「じゃあ、俺とはやてで先にやってみるか」

「うん」

俺とはやてで賽銭箱へ向かう。

まずお金を入れて…、これは5円でいいか。

鈴を鳴らして手を揃える。

「（今年は怯える恐怖が無くすごせますように…）」

いつからだろうか、前世のころから気づけばこれしか願ってない気がする。

…叶ったことは1度も無いが。

横のはやてを見ると終わったようだ。

「ま、こんな感じだ。みんなもやってみ？」

少し戸惑いながらも五人は賽銭箱へと向かっていった。

シグナム、ザフィーラ（人型）、リィンフォースは俺たちがやったとおりに特に不備もなく終えた。

ヴィータは途中鈴を鳴らすのを忘れたりしたが問題無かった。

…だが、シャマルは…。

「まてまて！　1万円入れることは無いぞ！！」

「え？　でも金額も多い方が良いのかと…」

「あくまで気持ちでいいんだよ！　1万円も入れることは無いって

…」

とまあ、すこしうっかりしているシャマルのハプニングもあったが無事終えた。

「あ、どうせやからおみくじやっていかへん？」

「おみくじねぇ…」

「おみくじってなんだ？」

「くじを引いて今年の運を占うんよ、大吉が良くて大凶が一番悪いんや」

「なるほど、おもしろそうですね」

みんなも意外とノリノリのようなので、引いて行くことにした。
俺はおみくじ嫌いなんだけどな…。

「じゃあまずは私から…やった大吉や！」

「なになに…『友達増える』か、いいじゃないか」

「お友達…楽しみやなぁ」

1番手のはやては大吉、幸先良いスタートだ。

「じゃあ次はあたしだ！　…凶」

「あちゃぁ…『改善にはもっと甘えるべし』？　…なんのことだろ

うな？」

「私…なんとなくわかるわ」

はやてには分かっているようだが俺にはさっぱりだ。

ヴィータってかなり甘えてると思うんだが。

「兄貴？」

「ん？」

「アイス奢ってくれ」

「なんだよ唐突に…まあいいけどさ」

「よし！」

ていうかこんなに寒いのにアイスが欲しいのか…。

「では次は私が…はっ！」

「いや、そんな気合い入れんでも大丈夫よ…？」

気合いの入ったシグナムの結果は小吉だった。

「まあ…普通ってとこか、『仕事見つからず』…なんだこれ」

「さぁ…私にもなんだか」

ヴィータといいシグナムといいよくわからん内容だな。

「それでは次は私が…む？」

ザフィーラはシグナムと同じく小吉だった。

「『腐ったものに気をつけろ』…なんでだろう、その物が分かる」

「…私にもわかります慎一殿」

俺とザフィーラは同時にシャマルを見た。

「…？　どうかしましたか？」

わけがわからないといったシャマルの顔。

「…今年も頑張ろうなザフィーラ」

「はい…」

「…？　じゃあ次は私が…えい」

「うわ、あたしと同じ凶じゃん」

「ふむ、『台所に近寄るべからず』」

『……』

リィンフォースが読み上げた途端、シャマル以外の俺たちは同時に首を縦に振った。

「ひ、ひどい…」

その様子を見てシャマルは崩れ落ちた。

まぁ…しょうがないよね。

「俺は最後でいいから先どうぞリィンフォース」

「はい、ではお先に失礼しますお兄様」

リィンフォースも引き、中身を確かめる。

「リィンフォース大吉や！　おめでとう」

「『気持ちに気づく年となるでしょう』って書いてあるぞ」

「気持ち…」

気持ちってなんだろうな。

感情を覚えるってことか？　…違うか。

「じゃあ最後は兄ちゃん…やね」

「まぁ、どうせ決まってるだろうな」

「…やっぱり？」

俺はため息を吐きながらくじを引いた。

「うわ、兄貴大凶じゃん…」

「これって私とヴィータちゃんよりひどいですよね…」

俺が引き当てたのは大凶。

実はこれ、毎年のことだ。

「『今年も恐怖が消えないでしょう』…ああ、やっぱりか」

これ、前世からずっと続いてるんだよね。
何度かお払いも受けたけど意味無かったし。

「ま、こんなもんだろ」

毎年同じということは、今年も去年と同じ。
去年は悪い年じゃ無かったし今年も悪い年にならない。
そう捉えられる。

…超プラス思考だけどさ。

結局今年も腐った運命だということだ。

第7話「そっくりすぎて…」

「3番テーブルオーダー入りました！」

「じゃあ、これ5番さんに持って行って！」

「了解でーす！」

息を吐く暇もなく動き回る。お昼の翠屋は喫茶店ということもあって忙しい。

凝った料理じゃなきゃ多数あるし、何よりコーヒーとシュークリームは絶品だし。

「慎一くん！　ボサッとしてないでここ片付けるよ！」

「あ、すいません！」

ほんと忙しい…。

第7話「そっくりすぎて…」

「あー…やっと終わった」

ピークも過ぎやっと落ち着いた所で休憩をもらった。
ヘトヘトだったのでとりあえずへたり込む。

「お疲れ様、慎一くん」

「あれ、美由希さんも休憩ですか？」

「うん、そうだよ」

そう言ってテーブルに何か料理が置かれる。

「…これは？」

「まかないだよ。私が作ったから一緒に食べよう？」

「わざわざすみません…」

はやて以外で異性が作る料理を食べるの初めてだな…。
どきどきしながらその料理を口に運んだ。

「…あれ？」

気づいたら横になっていた。

あれ？　俺はさっきまでバイトしてて…それで休憩に入って…。

何故だろう、そこから先が思い出せない。

「あ、気づいたんですか？　よかった～…」

「え、なのは…？」

部屋に入って来て、俺に声をかけたのはなのはだった。

「慎一さん、休憩中に倒れたって聞いたんで心配したんですよ…」

「た、倒れた！？　なんでだ…思いだせない…」

「……原因はお姉ちゃんなの」

「ん？　なに？」

「い、いえ！　食あたりで倒れたらしいです！（嘘は言ってない！　嘘は言ってない！）」

食あたりか…。朝に食べたのが不味かったか？
でも食べたのトーストだしなぁ…。

「それとお父さんが今日はもうあがっていいとの事です」

「あ、そうなの。でも今日はラストまでだったからな…申し訳ないなぁ」

「それはお姉ちゃんがやるので大丈夫です」

「うわー…美由希さんに迷惑かけちゃったな…」

「……迷惑かけたのお姉ちゃんなの」

「ん？　何か言った？」

「な、なんにも言ってないです！」

なのはの目はかなり泳いでるんだが…まあ良いか。

「さてと、それじゃあ帰るかな…」

「え、もう帰っちゃうんですか？」

一応早退命令喰らってるからねぇ…。

なのに何故そんな悲しそうな目をするんだ。

「（しかしこうして見ると本当に綾香に似ているな）」

「……っ！」

「（今のように悲しそうな目もそっくりだ）」

「……っ（慎一さんにみ、見つめられてるよぉ…っ）」

「（あれ？　なんかドキドキしてきた…）」

「……っ（か、顔が熱いしドキドキする…）」

綾香のことが好きなこの気持ちは未だに消えてない。
未練がましいと言われようと…。

「あ、あの慎一さん！？」

「うぁっ！？　な、何かな？」

やばいやばい、思わずなのはに見惚れてた。
なのはもいつの間にか顔が真っ赤だ。

「え、えーと…そんなわけで帰るよ！」

「は、はい…」

何がそんなわけかは自分でも言っててわからないがこの場から逃げたい。

幸いなのはも少しボーっとしていたし。

帰り道もドキドキした気持ちはなかなか消えなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7865o/

魔法少女リリカルなのは一夢を追う少年の行き先

2012年1月14日15時54分発行